C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2010

Vol.4

小学版

特集

3 全面実施への助走 第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

4 課題整理と提案

授業と家庭学習の相乗効果で学力と自ら学ぶ習慣を育む

帝京大教職大学院 **矢野英明** 客員准教授／神奈川県平塚市立神田小学校 **田中千勢子** 校長

10 学校事例 1

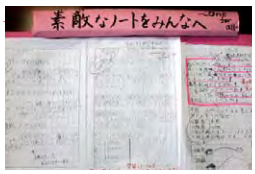
次時につながる課題で授業と家庭学習をサイクル化

宮城県登米市立北方小学校

14 学校事例 2

家庭学習を「授業づくり」の一部と捉え、単元構成を工夫

広島県三次市立三和小学校



18 学校事例 3

年3回の「スリーアップ作戦」で授業力、学習習慣、学力定着を改善

京都府京丹後市立峰山小学校

22 学校事例 4

個々の課題を捉え、実態に即した家庭学習や補習を実施

東京都墨田区立第三吾嬬小学校

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

「子どもを好きになる」教育の基本を教えてくれた恩師

熊本県熊本市立池上小学校校長◎**松居眞理子**

26 Let's go! 外国語活動

中学校・高校と一貫して、国際交流する力を育む「カナダ学」

北海道鹿追町立鹿追小学校

28 つながる学校と家庭の学び

児童の振り返りと保護者通信で家庭学習習慣が定着

福岡県川崎町立池尻小学校

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い
Vol.4

「子どもを好きになる」教育の基本を教えてくれた恩師

熊本県 熊本市立池上小学校校長 松居眞理子 MATSUI MARIKO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、松居校長が語る。

まつい・まりこ　教師だった両親の姿を見て育ったことが、教師を目指したきっかけ。水俣市立水俣第二小学校教諭、熊本市立碩台幼稚園園長、熊本市立銭塘小学校校長などを経て、2010年、熊本市立池上小学校に校長として赴任。

- 1976（昭和51）
  新採として
  福岡県志免町立
  志免東小学校に赴任
- 1979（昭和54）
  熊本県水俣市立
  水俣第二小学校に赴任。
  白瀬校長と出会う

水俣第二小学校時代の
教師が集まった時に
白瀬校長を囲んで

- 2000（平成12）
  熊本市立川尻小学校に
  教頭として赴任
- 2003（平成15）
  熊本市立碩台幼稚園に
  園長として赴任
- 2006（平成18）
  熊本市立銭塘小学校に
  校長として赴任
- 2010（平成22）
  熊本市立池上小学校に
  赴任

初任校で挫折した私に自信を与えてくれた

大学卒業後、福岡県の教師になりましたが、抱いていた小学校のイメージと現実とのギャップに戸惑い、2年後に退職しました。しかし、教師への思いがどうしても捨てられず、故郷の熊本に戻り、再挑戦することにしたのです。

1年間の苦しい勉強の末に採用試験に再合格し、赴任したのは水俣市立水俣第二小学校。「もう失敗できない」という重圧を抱えていた私を温かく迎え入れ、教師としての基本を教えてくださったのが、校長の白瀬友信先生でした。

白瀬校長は温厚で物静かな方で、若手教師を自宅に招いて勉強会を行い、奥様の手料理でもてなされていました。私も含め、一人暮らしの教師が多かったので、食生活の面も気に掛けてくださったのでしょう。

当時は今のように研修制度が充実していませんでした。他の先生方とおいしい料理をいただきながら、白瀬校長の話を聞くのは何よりの楽しみでしたし、有意義な研修でした。白瀬校長は決して叱るようなことはなく、「澤田先生（松居先生の旧姓）

は頑張っていますね。この間の授業は良かったですよ」などと、一人ひとりの良さを認めながら、指導方法や子どもとの接し方を、優しい口調で具体的に教えてくださいました。

教師によって考え方や性格はさまざまですが、白瀬校長は、一人ひとりを信じて伸ばそうという気持ちがとても強かったのだと思います。そんな白瀬校長に支えていただき、私は次第に自信を持って子どもに接することが出来るようになりました。

担任をしていた学級に、家庭の問題によって不登校の傾向がある子どもがいました。当時は「不登校」という言葉もなく、教師が子どもを家に迎えに行くようなことはすべきではない、と考えられていました。しかし、私はどうしても放っておけず、迎えに行きたいと思いました。一方で、「一人の子どもを特別扱いするようなことをしていいのだろうか」という気持ちもありました。

そのことを白瀬校長に相談すると、「子どものためになるように、しっかり頑張りなさい」と送り出してくれたのです。私の迷いは吹っ切れました。家庭訪問で学級を空ける間、他の先生が子どもを見てくれていました。それも白瀬校長が協力をお願いしてくれたのだと思います。

自分を信じ挑戦する教師をどこまでも支えたい

当時の私は若気の至りというか、あまり周囲を気にせず、自分が良いと思うことをどんどん実行していました。ある時、先輩の一人から「あまり頑張り過ぎず、ほどほどにするように」と注意されましたが、白瀬校長はそのようなことを一切言わず、どんな時も見守ってくれました。

今思えば、私にも反省すべき点がたくさんありました。当然、白瀬校長もそれに気付いていたはずです。しかし、「出る杭を打つ」のではなく、懸命に頑張っている者を支え、それぞれの良さを引き出していくのが、白瀬校長の教師に対する一貫した態度でした。そのために白瀬校長ご自身が「許容する苦しみ」を感じていたかもしれません。それでも教師を励ますことで、周囲の教師も「自分も頑張ってみよう」という気持ちになり、学校全体に前向きな雰囲気が生まれていたのだと思います。

白瀬校長を見習い、私も教師として、子どもの良さを認めて伸ばすという接し方を心掛けてきました。その経験を通して確信したのが、「子どもを好きになること」こそ、教育の第一歩だということです。欠点ばかりを気にすると良さが見えなくなりますが、子どもを好きになって褒めていると、自然と欠点が小さくなっていきます。そして、そのような望ましい変化は、周囲の子どもにも広がっていくのです。

白瀬校長の教えは、自分が校長となった今も強く意識しています。学校経営の最終的な責任は校長にあるからこそ、現場で頑張っている先生には思い切って自分が良いと思ったことを試してほしい。それが子どものためになると思っての行動ならば、私はどこまでも支えていくつもりです。

今の自分に出来ることを精一杯頑張ることで、人は成長するのだと思います。そのように絶えず自分自身を高めていけることが、教師という仕事の醍醐味ではないでしょうか。

「良いと思ったら試してみる そんな先生方を支えたい」

特集

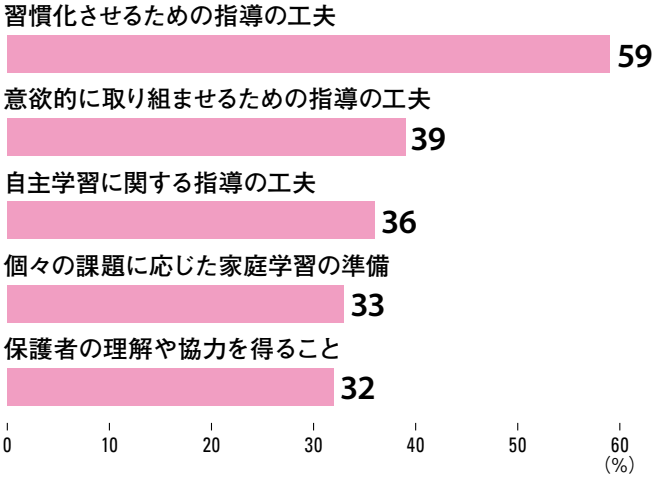
全面実施への助走 第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

家庭学習の指導は、多くの小学校でなされているが、課題もある。日々の授業に加えて家庭学習をより充実したものとするためには、どのようなことが必要か。学校全体で家庭学習を深めるための視点と実践のヒントを紹介する。

Q 家庭学習の指導上の課題は？

＊「課題は感じていない」の選択肢を含め、当てはまるものを3つまで選択。上位5項目



＊2010年8～9月、全国の『VIEW21』小学版読者モニター（小学校教師）へアンケート用紙を郵送し、ファクスで回収。有効回答数は76

＊校長のみの回答結果はP.6図3参照

授業と家庭学習の相乗効果で学力と自ら学ぶ習慣を育む

家庭学習は何のためのものか。日々の指導を、子どもの学力や学習習慣につなげるためにはどうすればよいか。家庭学習の現状や課題、必要な視点について、帝京大教職大学院の矢野英明客員准教授と、矢野先生の指導の下で校内研究を進める神奈川県平塚市立神田小学校の田中千勢子校長に聞いた。

なぜ家庭学習は必要か

――まず、「家庭学習」と「宿題」をどのように捉えればよいでしょうか。

矢野　教師が「やってきなさい」と課す課題が「宿題」で、「宿題」に加え、子どもが家庭で自主的に取り組む自主学習も含めた、家庭での学びのすべてが「家庭学習」と言えるでしょう。

田中　宿題と家庭学習の言葉を区別せずに使う学校は多いと思います。また、家庭学習は大切だと感じながら、なぜ大切なのかをしっかり議論してこなかったように思います。

矢野　おっしゃる通りだと思います。改めて、家庭学習が大切な理由は、二つあります。一つめは、今後求められる力を育むには、授業と家庭学習、学校と家庭の相乗効果が必要になるため。二つめは、子どもが自ら学ぶ習慣を付けるためです。

――一つめの「相乗効果が必要」とはどのようなことですか。

矢野　これからは、基礎的・基本的な知識・技能だけではなく、それらを活用して課題を解決できる思考力・判断力・表現力が求められます。これらの力を付けるためには、授業が中心であることは間違いありません。しかし、実生活で生きる力を付けるには、教室の中だけでなく、学んだことと実生活との結び付きを考えたり、学んだことが日常生活でどう生かされるのかを体験したりするなどの、家庭での学習が欠かせません。このことは、新学習指導要領にも示されています（図1）。

田中　２００７年度に本校に着任した当時、子どもが落ち着いて授業に参加できない状態をどうにかしたいと考えました。まず授業を子どもにとって分かるもの、楽しいものにしようと、最優先で授業改善に取り組んできました。授業に向かう姿勢は出来てきましたが、それだけでは更なる学力向上に限界があるのではないかと感じるようになりました。この経験から、子どもの学力向上には家庭と連携

ポイント

- 家庭学習は、思考力等の今後求められる力や、自ら学ぶ学習習慣を付けるために必要
- 個々の子どもに付けたい力の本質に立ち返り、授業と家庭学習に必要なことを考える
- 保護者にも、家庭学習の考え方や、協力してほしいことを伝える
- 新課程の全面実施となる2011年度は家庭学習を見直すのに適した時期。学校全体で考えていく機会にする

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

帝京大教職大学院教職研究科
矢野英明 客員准教授
やの・ひであき◎神奈川県内の小学校教諭、校長などを経て現職。中央教育審議会教育課程部会理科専門部会委員。専門は理科教育、教育課程。著作に「家庭学習との関連」（無藤隆・嶋野道弘編、ぎょうせい『学習指導の工夫改善と充実』第6章）など。

神奈川県平塚市立神田小学校
田中千勢子 校長
たなか・ちせこ◎平塚市立小学校教諭、神奈川県教育委員会教職員課副主幹、義務教育課指導主事・同課長代理等を経て、現職。平塚市立神田小学校◎神奈川県のほぼ中央部に位置する平塚市北東部の住宅街にある。学校経営構想「学びの定着と継続」に向けて家庭学習の検討を進める。児童数は483人。

した家庭学習が必要だと考えるようになりました。

矢野 思考力などを育むには、授業で子ども自身が考えたり、学級内で考えを深め合ったりする時間を十分に確保することも必要です。限りある時間で子どもの力を最大限伸ばすためには、授業だけではなく、家庭での学習時間も併せて考えることが大切なのです。

――二つめの「自ら学ぶ習慣を付けるため」とはどのようなことですか。

田中 最終的に、勉強は一人でしていくものだと思います。どこかの段階でその姿勢を身に付けなくてはなりません。授業だけでは時間に限りがあり、自ら学習する習慣を育むために、家庭学習は大切だと思います。

矢野 自ら学ぶ学習習慣がなければ、教師や保護者、塾から言われたことをこなすだけの子どもになってしまいます。

田中 学習習慣が身に付いている子どもとそうでない子どもは、学習意欲が全く違います。学習習慣が身に付いていれば、自分のペースで学び直し、理解することも出来ます。前時までの学習を自分のものにした子どもは、「次の授業では何を学べるのか」という気持ちで授業に臨んでいます。

矢野 これは、授業に対する「構え」と言えます。構えのある子どもは、教科書やノートを

図1　新学習指導要領　第1章　総則

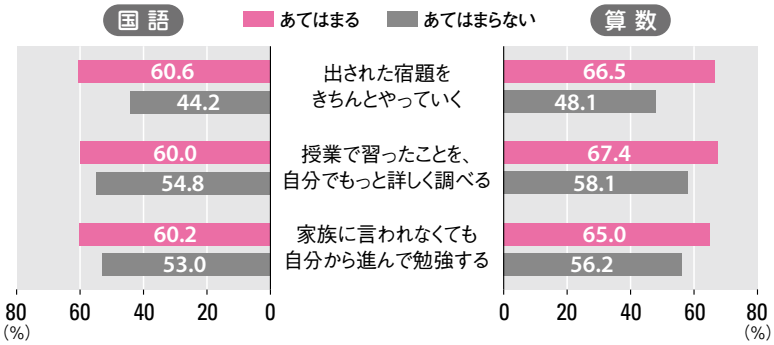
第1　教育課程編成の一般方針・1からの抜粋

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

＊下線部分は編集部加筆

図2　家庭学習の様子と正答率の関係（5年生）

■国語・算数の平均正答率（家での学習の様子別）



注）「あてはまる」「あてはまらない」のそれぞれについて、共通問題での平均正答率を示している。「まああてはまる」「無回答・不明」の平均正答率は省略した
出典：Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査・学力実態調査」　調査時期は2006年11月、調査対象は「第4回学習基本調査・国内調査」の対象者のうち、小学5年生2,446人、中学2年生1,723人

開いて授業が始まるのを待っています。家庭学習習慣が身に付いている子どもの方が正答率が高いというデータがありますが（P.5図2）、これは単に学習時間が長いからというだけでなく、学習への構えがあることが正答率の高さに結び付いていると考えられます。

家庭学習指導の現状と課題

――家庭学習の指導上の課題は、どのようなことでしょうか。

矢野　大きく2点あります。1点目は、多くの学校が学習内容を検討しないまま家庭学習指導をしているため、子どもが必要性を感じて勉強できていないことです。どんな日でも漢字や計算を宿題にするなど、授業や個々の子どもの課題と関係のない無味乾燥な内容が一律に課され、学力の向上に結び付いていないこともあるのではないでしょうか。子どもも「指示された宿題をすればよい」と形式的に取り組んでいることが多いと思います。こうした現状に対して、実際、校長先生が課題意識を持っていることが『VIEW21』のアンケートからもうかがえます（図3）。

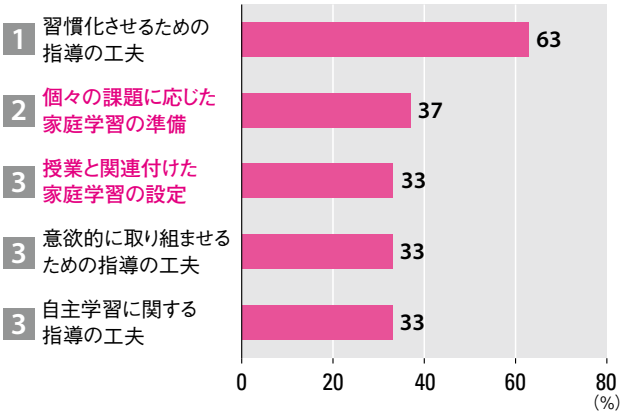
田中　本校でも、どの学級もほぼ毎日宿題を出しています。授業内容や基礎・基本の定着を図りたいと願い、全員の子どもに取り組ませるために、かなりの労力を割いています。ところが、なかなか学力の向上や学習習慣の定着に結び付いていかないことが課題です。

矢野　「勉強しようという気持ちがわかない」という子どもは小学生の3割以上いて、中学校以降は更に増えています（図4）。諸外国に比べ、日本では学習の大切さを実感する子どもが少ないという結果（図5）とも関連しているのではないでしょうか。

田中　つまずく点は子どもによって違うため、一律に課す宿題には限界があります。ただ、個々の子どもに応じた宿題を出したい、内容の工夫をしたいと思っても、多忙で難しいことも事実です。授業や校務で手一杯の先生方に、「家庭学習についてもっと考えてください」とはなかなか言えません。他の検討課題が多数あり、家庭学習は議論の中心となりにくいということもあります。

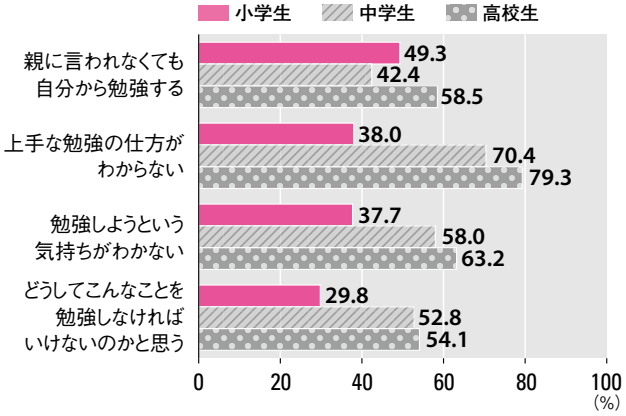
矢野　2点目の課題は、宿題や家庭学習の意義を保護者に伝えられていないことです。保護者が「宿題は出たの？　やりなさい」というだけでは、子どもは学ぶ意味や面白さを感じられず、意欲も湧かないでしょう。保護者が「勉強は学校でするもの、保護者はかかわらないもの」という意識を持っている限りは、家庭学習の充実は難しいと思います。

図3　家庭学習の指導上の課題（校長のみ）



注）「課題は感じていない」の選択肢を含め、当てはまるものを3つまで選択。上位5項目
出典：『VIEW21』小学版　読者モニターアンケート　調査時期は2010年8～9月、調査対象は『VIEW21』小学版読者モニターのうち、小学校校長27人

図4　勉強の取り組み方（学校段階別、4～6年生）



注）「とてもそう」「まあそう」の合計。小学生は4～6年生
出典：Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」　調査時期は2009年8～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生（小学生は3,561人）

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

学力と意欲を高める家庭学習とは

――課題の1点目の対策としては、どのような取り組みが考えられますか。

矢野　どのような力を子どもに付けたいのか、その本質を考え、まずは授業を改善することです。おのずと、家庭での学びの必要性や内容も見えてくるでしょう。例えば、理科でメダカのオスとメスについて学習する場面では、メダカのような小さな生き物にもオスとメスがいて、種の保存をしているという生命の仕組みを知り、その不思議さを実感することが授業のねらいです。授業で生命の素晴らしさを伝えた上で、他の動物の種の保存について確認する宿題を課せば、学んだことを実感を伴って理解できますし、学ぶ面白さも感じられます。加えて、個々の子どもに合わせた課題設定も大切です。全員が個別ではなくとも、レベルを変えた3種類ほどのプリントを用意するだけでも、学習効果はかなり高まります。先生方はとても忙しいと思いますが、それが子どもの力に結び付くことであれば、「忙しい」とは感じないはずです。

田中　本校でも、何種類かのプリントを用意し、子どもが自分に合ったものを選んで取り組む方法をとっている学級もあります。

矢野　子どもに自分で選ばせるのは、良い方法ですね。最初は、レベルが合わないものを選ぶ子どもがいるかもしれませんが、最終的には自分に適した難易度のものを選ぶようになります。「自分の力に合ったと思う問題プリントを取ってください」とするだけでも、自分で選んだという気持ちから意欲は高まります。「次はもっと頑張ってみよう」という向上心も期待できます。

田中　取り組んできた内容に目を通すことも有効な方法です。家庭学習用のノートに教師が励ましのコメントを付けたり、「次はこんなことに挑戦してごらん」と課題を示すと、子どもが意欲的に取り組むようになります。教師の助言により「これまでは計算問題ばかりだったけど、調べ学習もしてみよう」など、自身の課題に気付くこともあります。

矢野　子どもが自己評価をするための一つの機会ですね。普段は難しくても、長期休業の時だけでも個々の課題に取り組む機会にするのはどうでしょうか。私は学級担任をしていた時、夏休みの宿題を一人ひとりの子どもと相談して決めていました。例えば、「小説を書いてみたい」という子どもには「やってごらんなさい」と意思を尊重する一方で、「あなたは算数のこの部分が少し苦手だから、これもやってみてはどう?」と提案するのです。一律に課されるのとは違い、自分で納得した宿題なので子どもは意欲的に取り組みますし、個別の課題も克服できます。

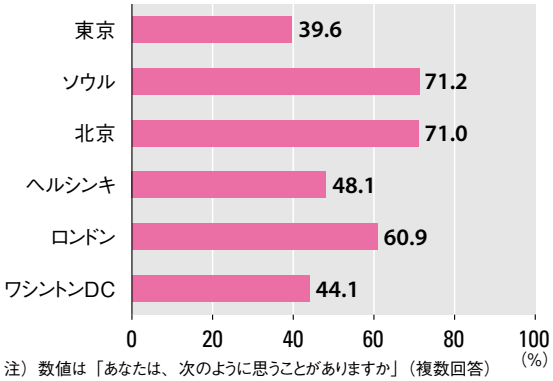
――2点目の課題についてはどうでしょうか。

矢野　学びは「学校」と「家庭」の両輪で育むもので、保護者の役割は子どもの頑張りを認め、励ますことだと、保護者に伝えることです。「この前は出来なかったことが出来るようになったね」「ずいぶん上手になったね」などの一言で、子どもは学びを通して自分が成長していることを実感できます。学びへ向かう姿勢だけでなく、「生きる力」の基盤としての、自分への自信と誇りを持たせることも出来ます。

田中　保護者の方へは、このようなかかわりを、保護者会などでお願いする必要がありますね。「家庭学習へのかかわり方が分からな

図5　「勉強すること」の価値（10～11歳）

■今は勉強することが一番大切なことだ



注）数値は「あなたは、次のように思うことがありますか」（複数回答）に対して選択した子どもの比率
出典：Benesse教育研究開発センター「学習基本調査・国際6都市調査」調査時期は2006年6月～07年1月、調査対象は上記6都市の10～11歳（5,972人）

い」という声もよく聞きます。

矢野　保護者へは、かみ砕いた言葉で伝えることが大切です。「生きる力の育成のために」などの言葉ではなく、「お子さんに自信と誇りを持たせるために」と言えば、思いを共有できると思います。また、かかわり方は具体例を示しながら話すと良いと思います。例えば、算数では一緒に家の中の球体を探す、理科では月の動きを一緒にベランダから見てもらう、家庭科では夕食作りを手伝わせる、などです。なお、子どもの学びにおける保護者の役割は、「子どもを認めることと励まし」ですが、教師はこれに加えて「学び方を指導する」ことが必要です。次に取り組むべき課題を示したり、「総合的な学習の時間」で学んだ調査方法が別の教科に生かせることを示すなどして、学び方を広げるようにすることが大切です。

田中　教師は、子どもの学習の状況を常につかんでいる必要がありますね。つまずいた個所などを見極め、次の投げ掛けを考えなくてはいけません。

学校全体での取り組み方

――最後に、家庭学習を学校全体で考えてい

神奈川県 平塚市立神田小学校の実践
教師全員で家庭学習の在り方を議論

学力向上への意識の高まりの上に家庭学習を含めた構想を提案

平塚市立神田小学校は、学校経営構想「学びの定着と継続」の具体化を進めている。この構想は、①学校研究、②授業づくり、③家庭との連携、④児童指導、の四つのブロックから成る（図6）。学校全体の方針を検討する企画会議の委員がいずれかのブロックを担当し、それぞれの視点から学校づくりを考える。

「家庭との連携」では、保護者との連携を軸とした家庭学習の習慣化の他、家庭への啓発や生活習慣の確立などを模索している。

「まずは授業の質を高めることに力を注ぎ、2年間をかけて授業が徐々に改善されてきた段階で、家庭学習も含めて学力向上の方針をつくりたいと考えました。『学びの継続』という言葉には、家庭と学校、学年間、学校間へつながるという願いを込めています」（田中校長）

矢野准教授の指導を受けながら取り組んだ授業研究において、特に重視したのは「子どもの思い」だ。研究授業を参観する教師は、担当する子どもを決め、一人ひとりがどのよ

平塚市立神田小学校
田中みどり Tanaka Midori
教務主任。「長期的視点に立って物事を考え、学年を超えて共に学び、共に育っていきたい」

平塚市立神田小学校
山田千夏 Yamada Chinatsu
5学年担任。「子どもが最終的に一人で問題を解決できるようになるための手助けをしていきたい」

図6　「学びの定着と継続」構想図

＊同校の資料を基に編集部で作成

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

くためのポイントや手順をお聞かせください。

田中　学年ごとに指導が違っていては、小学校6年間で、力を育み、自ら学びへ向かう姿勢を育てることは出来ません。系統性のある指導をするために、学校全体としての方針を共有することが必要だと思います。

矢野　新課程が全面実施となる11年度は、学校全体で家庭学習を考えるのに適した時期です。次のような流れで、1年後くらいに改善の方向性を出せるよう考えてみてはいかがでしょうか。

❶年度当初に、校長としての方針を示す
❷方針に照らし合わせ、個々の教師が夏休みまでを目安に家庭学習指導を実践してみる
❸夏休みに1学期の実践を全員で振り返り、実施状況と課題を集約する
❹改善案を考えたり試行したりしながら、現状と課題の洗い出しを続ける
❺1年間を通じて出てきた課題と改善点を基に、次年度からの方針をまとめる

田中　本校でも、全員で考え方を共有していくことが大切だと思い、いつも学校全体で検討するようにしてきました。全員が共通理解することを重視して少しずつ歩みを進めているという状態ですが、11年度へ向けて方針を固めていきたいと思っています（神田小学校の検討の様子は下部参照）。

――本日はありがとうございました。

うな表情や反応を見せるかを細かく観察し、それを基に議論した。指導技術だけではなく、子どもの姿に重点を置いたことで、次第に教師が子どもの目線から授業づくりを考えるようになっていった。

全員で検討しながら1年間をかけて方針を策定

同校では、家庭学習についてはそれぞれの教師が学級の実態を考えながら取り組んでいた。10年度中に11年度以降の方針の策定を予定し、次のような体制で検討を重ねてきた。

❶09年度8月に「学びの定着と継続」の構想の枠組みを提案
❷ブロックごとに具体的な取り組み内容について話し合いを重ね、校長、教頭と各ブロックのリーダーが参加する月1回の企画会議で検討
❸10年度1学期に、家庭学習や宿題について、教師全員にアンケートを実施。学年やブロックで、指導の現状や課題を話し合う
❹10年度1学期終了後に「1学期を振り返る会」を実施。1学期に実践したことや、思いなどを交流
❺10年度2学期には11年度から取り組んでいく家庭学習の考え方、進め方を職員会議で検討し、学校としての考え方を策定

「家庭との連携」ブロックのリーダーを務める教務主任の田中みどり先生は、次のように話す。

「個々に任せていた家庭学習を、学校として考え進めていくには、課題がいくつかあります。学校だけ、授業だけでは基礎・基本の習熟を図ることは出来ませんし、宿題だけでは家庭での学習の習慣化にはなかなかつながっていきません。そこで、宿題の良さを生かしながら、子どもの主体的な学びにしていくために、子ども自身が課題を選択するという方法を取り入れることにしました。そこから自らの学びに移行するために、選択の幅を学年の実態に合わせて広げ、いずれは、自分に合った課題や興味・関心を持った学習に、進んで取り組んでいくことが出来るようにしたいと考えました」

教職歴2年の山田千夏先生は、変わってきた子どもの様子を次のように話す。

「今までは、宿題だったため、与えられたものに取り組めば安心だったようですが、家庭学習を始めると、自ら課題を見つけ、計画的に学習するようになりました。また、自分が興味を持ったことを意欲的に追究するようになり、さまざまな出来事に目が向くようになりました」

10年度の2月には、保護者と共に家庭学習について矢野准教授の話を聞く機会を設ける。これまでの検討内容と併せて、方針を確定させ、11年度からの実践につなげる考えだ。

次時につながる課題で授業と家庭学習をサイクル化

宮城県 登米市立北方小学校

授業と家庭学習の相乗効果により、「活用する力」の育成を図ろうとしている登米市立北方小学校。次時の学習内容に関連した学習事項を家庭学習の課題とすることで、両者の「サイクル化」を目指した「登米っ子学習」を取り入れている。

取り組みのポイント

- ◉家庭学習に、次時の授業での学習事項につながる「登米っ子学習」課題を取り入れ、授業と家庭学習をサイクル化している
- ◉「登米っ子学習」課題により、授業では「学び合い」の時間を確保。「活用する力」と共に、家庭学習への意欲も育む

課題 宿題に意義を見いだせず家庭学習への意欲が低下

静かな田園地帯にある北方小学校は、保護者や地域住民の多くが同校の卒業生だ。地域と一体感の強い環境の中で、子どもは伸び伸びと学んでいる。研究主任の金野ゆかり先生は、学校の様子を次のように話す。

「素直で純朴、のんびりとした優しい性格で、教師に言われたことはきちんと出来るのが、本校の子どもの良さです。その半面、自分の考えを主張する積極性に欠けることが気に掛かっています」

課題解決のために自分の考えをまとめたり、相手に説明したりする力を付けたいと考え、2008年度から「『活用する力』を高める指導方法の工夫・改善」を研究テーマに掲げてきた。09年度からは、友だちとの「学び合い」によって自分の考えを発展させていく活動をより重視している。

ねらいの達成に向け、同校は授業力の向上と同時に家庭学習の充実が必要だと考えた。しかし、大きな課題として、宿題と授業との「関連」の弱さがあった。子どもによっては、基礎・基本の習熟を図るプリント学習などに意義を見いだせず、意欲が湧きにくかった。また、学級により家庭学習の質・量に差があっ

School Data

◎1873（明治6）年開校。校区は田畑などの自然環境に恵まれる。2005年度から3年間、文部科学省の学力向上拠点形成事業の指定を受け、授業力向上に取り組んだ成果が現在の研究に生かされている。

校長　伊藤 清先生
児童数 211人　学級数 8学級（うち特別支援学級1）
所在地 〒987-0513　宮城県登米市迫町北方字富永110-5
TEL　0220-22-2286
URL　http://www.cms-school.jp/kitakata/
公開研究会　未定

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

た。学校行事などには協力的な保護者も、「宿題は子どもが一人で取り組むもの」という考えから、家庭学習にかかわらないことがあり、家庭との連携にも改善の余地があった。

家庭学習の位置付け

授業とのサイクル化を図り宿題とは明確に区別

これらを踏まえ、09年度に「登米っ子学習」という、授業と家庭学習のサイクル化を図る学習形態を全校で取り入れた。「登米っ子学習」は市内の公立小・中学校で一斉実施している取り組みだが、その取り組みの方法はさまざま。同校の特色は、授業と家庭学習を連動させる中で「学び合い」を重視する点にあり、国語と算数で取り入れている。

サイクル化とは、日々の授業と家庭学習を継続的に関連付けて行うことだ。授業は家庭学習での課題を基に進められ、授業の終わりには次時へつながる新たな家庭学習課題が出される。このサイクル化の鍵となる家庭学習が「登米っ子学習」課題だ。本時の問題場面を把握する課題や、レディネスをそろえる課題を出し、授業と家庭学習の相乗効果で「活用する力」の育成につなげる。「登米っ子学習」課題は各授業のまとめの段階で出され、授業の中でペアやグループで課題の結果を発表したり話し合ったりして、学びを深めていく。

「登米っ子学習」課題は、5～10分程度で取り組める難易度・分量としている。分からない問題や時間のかかる問題に直面した時、子どもは学習意欲を失いやすい。まずは家庭学習の習慣化が先決と考え、「誰でも少し考えれば出来る」というレベルに設定している。

国語・算数としたのは負担軽減のためだが、どちらもほぼ毎日授業があり、サイクル化しやすいからでもある。「登米っ子学習」が教師にも子どもにも定着した今は、他教科で「登米っ子学習」を取り入れることもある。伊藤清校長は、「子どもも教師も、続けられなければ定着しません。子どもが『嫌だな』と感じることなく、前向きな気持ちで取り組める学習でありたいと考えています」と話す。

毎日の家庭学習としては、「登米っ子学習」課題と共に漢字学習、音読、プリント学習（計算問題など）の宿題、その他に自主学習を課す学年もある。分量は、「登米っ子学習」課題と合わせて「学年×10分間」で取り組める程度だ。宿題は基礎・基本の定着のため、自主学習は自分で内容を考えて学習に向かう姿勢を身に付けるためと位置付けている。

「登米っ子学習」の具体例

「登米っ子学習」課題により授業での「学び合い」の時間が充実

2年生国語の「組み合わせたことばをつかおう」の授業を通して、「登米っ子学習」の実践を見てみよう（P.12図1）。

子どもは「登米っ子学習」課題として「ふみつぶす」などの複合動詞が何と何の動詞の組み合わせかをあらかじめ考えてきた。担任の大崎元寛先生は次のように話す。

「前時との間に連続性が保たれるのが、『登米っ子学習』の大きな利点です。また、家で学習してきたことに関連した授業内容のため、子どもは自信を持って授業に臨めるようです」

授業の冒頭で前時の学習内容を確認した

登米市立北方小学校校長
伊藤 清 Ito Kiyoshi
「教師の在り方で子どもの将来は変わる。常に真摯な気持ちで、子ども一人ひとりと向き合いたい」

登米市立北方小学校
金野ゆかり Konno Yukari
研究主任。「失敗を恐れて自分から動かない子どもに、『やれば出来る』という勇気や積極性を与えたい」

登米市立北方小学校
菅原真理 Sugawara Mari
4学年担任。「親や友だちなど、周囲の人への感謝の気持ちを忘れない子どもを育てたい」

登米市立北方小学校
大崎元寛 Osaki Motohiro
2学年担任。「勉強や友だちとの交流など、あらゆる場面で笑顔が絶えない学級をつくりたい」

図1「登米っ子学習」を取り入れた授業の流れ

2年生国語

単元名　**組み合わせたことばをつかおう**

本時の目標　いろいろな複合動詞について、その意味や使い方を考える

授業者　大崎元寛先生

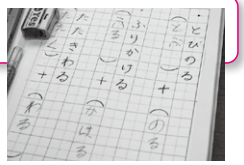
◎前時に出された「登米っ子学習」課題
組み合わせた三つのことばについて、どのようなことばが組み合わせてあるかを考えてくる

▼

前時までの学習内容をフラッシュ形式で確認

▼

前時に出された「登米っ子学習」課題の答えをペアで確認（「学び合い」）



グループごとに、「登米っ子学習」課題で考えてきた言葉（三つ）の中から一つを選び、動作化して発表する（「学び合い」）

▼

「登米っ子学習」課題で取り組んだ言葉（三つ）の中から一つを選んで短文をつくる

▼

◎本時に出された「登米っ子学習」課題
教科書に書かれている組み合わせたことばから一つを選び、ノートに文を書いてくる（学習内容の定着を図る）

事後検討会で出された意見・感想（一部）

□優れていた点

○「登米っ子学習」課題が生かされ、話し合いが活発に行われていた

○複合動詞をグループごとに三つに絞ったことで集約しやすく、イメージが浮かび、動作化によって理解を深められた

□更に工夫・改善が必要な点

○授業の中で、動作化の部分は少し時間を減らし、短文をつくる時間にもう少し時間をかけた方がよかったのではないか

○複合動詞の意味理解をより深化させるという点からも、例えば、「はく」と「あつめる」、そして「はきあつめる」のそれぞれの動作を考えることなどを「登米っ子学習」課題に出来たのではないか

＊同校の資料と事後検討会の様子を基に、編集部が一部抜粋して作成

研究推進」「家庭学習推進」のいずれかのプロジェクトに所属する。「登米っ子学習」にかかわるのは、「授業研究推進」「家庭学習推進」のプロジェクトだ。「授業研究推進プロジェクト」は授業研究会を通して「登米っ子学習」課題の設定や授業との関係性を研究し、「家庭学習推進プロジェクト」では家庭学習の習慣化に向けて子どもや保護者に働き掛ける。

授業研究会では、全学級担任が年1回授業を担当する。事前検討会では模擬授業を行い、「登米っ子学習」課題からの授業の流れも検討する。研究授業では、議論を焦点化するため「登米っ子学習」課題の評価も含めた「授業評価シート」を使用。すぐに集計し、事後検討会の話し合いに活用する。ワークショップ形式の事後検討会は、皆が積極的に発言する風通しの良さが特長だ。伊藤校長は、授業研究会についてこう説明する。

「授業研究会の活性化には、経験や立場にかかわらず、同じ目線で語り合う雰囲気づくりが重要です。私や教頭も参加し、先生方と本音をぶつけ合い、切磋琢磨しています」

授業研究会での検討を基に、授業研究推進プロジェクトが作成した課題例、ねらい、効果のリストも共通理解を促した（**図2**）。

後、隣の子とペアになって「登米っ子学習」課題の答えを見せ合い、違いがあれば自分の考えを相手に説明する。「学び合い」によって理解を深められるだけでなく、友だちに発表する場があることが、家庭学習の動機付けになり、習慣化につながっている。

「『学び合い』は重要な学習活動ですが、時間がかかるのが難点です。『学び合い』に必要となる個人で考える部分やそのための準備を『登米っ子学習』課題が担っているため、授業で『学び合い』の時間を十分に確保できるようになりました。これにより『活用する力』を育みたいと考えています」（金野先生）

一人ひとりが言葉の意味を考えてきていたため、4人グループでの学習活動でも活発な話し合いが出来ていた。

本時の「登米っ子学習」課題は、「教科書に書かれている組み合わせたことばから一つを選び、ノートに文を書いてくる」。複合動詞の更なる理解を図り、次時につなげるためにこの内容にしたという。

研究の進め方●●●

授業研究会を通じて「ちょっとした課題でよい」と確認

「登米っ子学習」は従来の宿題と視点が異なるため、当初は教師から「授業での生かし方が分からない」「難易度の設定が難しい」という声があった。ねらいや実践の共通理解に大きな役割を果たしたのは、授業研究会だ。

同校では、教師全員が「学力向上」「授業

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

「最初の1年間はどの教師も試行錯誤でしたが、研究を通してイメージを共有する中で、『ちょっとした課題でよいのだ』という理解が広がりました」（金野先生）

「登米っ子学習」課題はあくまでも次時の「入り口」に立たせる内容に設定するとよいことも見えてきた。例えば、算数では立式までを課題とし、計算の仕方は授業で扱う。家庭学習で計算をさせると、「またやるのか」と授業への意欲が削がれるからだ。

授業とのサイクル化を進めるポイントとしては、事前に課題を確定させないことも大きい。ある程度は想定しておくが、授業の進度や子どもの理解に合わせて調整することが大切と、4学年担任の菅原真理先生は話す。

「子どもの状況を第一に考えて課題を決めることが最も大切です。レディネスをそろえるために予習の意味合いが強い課題を出すつもりだったとしても、授業の理解度が低ければ、復習の課題に変えます。子どもによって理解度は異なりますので、学級全体の実態を捉えた臨機応変な課題設定が求められます」

保護者には、「一人で取り組むもの」という宿題のイメージを変えるため、保護者会や書面で「登米っ子学習」のねらいを説明し、「家庭学習には必ず目を通してほしい」と、家庭学習のチェックシートへの記入も依頼した。

「宿題といえばドリルをイメージする保護者が多く、『登米っ子学習』を理解してもらうには少し説明が必要でした。今では保護者の大半が賛同し、『登米っ子学習』の内容を気に掛け、協力してくれています」（大崎先生）

以前よりも見通しを持って授業を組み立てるようになりました。加えて教師間の情報交換が密になったり、教材研究に力を入れるようになったりと、多くの面から授業力が磨かれているのを感じます」（菅原先生）

家庭学習習慣の定着も進んでいる。「登米っ子学習」を行うには、基礎的な内容理解が土台として必要だ。「登米っ子学習」課題に取り組む中で、自ら基礎・基本の定着につながる宿題の意味を感じ、宿題に対しても前向きに取り組む子どもの姿が見られるようになった。「登米っ子学習」を軸として、授業と家庭学習のサイクルは順調に回り始めている。

図2 「登米っ子学習」課題例、ねらい、効果のまとめ

4年生算数

単元名 はしたの大きさの表し方を考えよう

「登米っ子学習」課題例	◆ねらい ◎授業での活かし方	効果
教科書 p.60の数直線に目盛りを付ける	◆小数も数直線に表すことができることを理解する ◎目盛りの大きさを確認させ、数直線上に書かれた大きさを読ませる 【知識を習得する】	数直線での表し方に興味を持たせることができた
教科書 p.62の問題文を読み、立式をする	◆数の構成を理解する ◎正確に10等分されていることを確認する 【知識を整理する】	1目盛りの大きさを全体で確認でき、スムーズに適用問題に取り組むことができた。また、学習の効率化が図られた

＊同校資料「『登米っ子学習』課題例」より編集部が一部抜粋して作成

成果 授業改善が進むと共に家庭学習への意欲が高まる

「登米っ子学習」により、何より授業改善が進んだと金野先生は話す。

「授業に『学び合い』が定着したことは、『活用する力』の育成において大きなプラスです。子どもたちが授業に意欲的に取り組む姿にもつながっていると思います」

教師の指導力も高まっている。

「『登米っ子学習』課題の設定の必要性から、

伊藤校長が重視する 校長としての役割

先生方が働きやすい環境づくりが、校長の一番の仕事だと思います。教具の整備から職員室の雰囲気づくりまで、すべきことは山ほどあります。教師が生き生きと授業をするようになれば、子どもは「今日はこれが出来た。明日は何が出来るようになるのかな」といった学びへの楽しみを持つようになるのです。

すべての子どもが、学習の充実、交友関係を中心とした学校生活の充実、そして、出来れば家庭生活での安心を感じながら伸び伸びと過ごすために、学校は何をすべきか。教師として、校長として、考え続けたいと思います。

家庭学習を「授業づくり」の一部と捉え、単元構成を工夫

広島県 三次市立三和小学校

思考力や表現力を育てるための一環として、家庭学習の充実を考える三次市立三和小学校。授業と家庭学習を双方から考えようとしているのが特色だ。教師全員で授業改善を進めてきた土壌を生かし、家庭学習についての共通理解を進めている。

取り組みのポイント

- ◉家庭学習を「授業づくり」の一環と捉える。指導案作成時には家庭学習の工夫を記入することで意識を高める
- ◉家庭学習と授業の相乗効果で、思考力や表現力の育成を目指し、具体的な実践の在り方を検討する

課題と手立ての基本方針

思考力や表現力に課題 四つの視点で授業を改善

広島県中央部に位置する三次市の山間にある三和小学校は、全学年単学級の小規模校だ。子どもはごく少数の大人と接する機会しかなく、卒業後は同じ中学校に進学する。山平弥生校長は子どもの様子を次のように話す。

「教師の言うことをよく聞く素直な子どもが多いのですが、半面、自分の考えを相手に伝える力や、積極的に自ら動く力が弱いと感じます。やがて社会に出て行く子どもたちです。小学生のうちから自己表現する力やコミュニケーション力を育てたいというのが、教師の思いです」

地域に塾はなく、子どもも保護者も「学校の勉強は大切」という意識が強い。「全国学力・学習状況調査」では全国平均を上回る領域もあるが、子ども間の学力差や、論理的思考力、表現力の育成には課題を感じている。

「どの子どもも意欲があるため、伸びしろは大きいと思っています。また、自分の考えを正確に相手に伝えるためには、論理的に考える力が必要です。子どもの前向きな気持ちを支えながら、どのように論理的な思考力や表現力を伸ばしていくかという視点で研究に取り組んでいます」（山平校長）

School Data

◎1971（昭和46）年開校。2002年度に文部科学省「学力向上フロンティア事業」の指定を受け、算数の研究に取り組む。07年度から算数と国語、10年度から国語の研究を通し「論理的思考力・表現力の育成」を図る。

校長	山平弥生先生
児童数	143人　学級数 7学級（うち特別支援学級1）
所在地	〒729-6702　広島県三次市三和町敷名1496
TEL	0824-52-3158
URL	http://www.miyoshi-miwa-e.hiroshima-c.ed.jp/
公開研究会	未定

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

校内研究のテーマは「論理的に考え、表現する力を育てる授業の創造」だ。２０１０年度は国語に重点を置き、ねらいの達成のために、①書く活動の充実、②ＩＣＴの効果的な活用、③単元構成の工夫、④授業と家庭学習との連動、の四つの視点で授業改善を進めている。特に①「書く活動」は、思考と表現の行き来により思考を促す重要な活動と捉え、書くねらい・内容・方法を意識して指導する。

同校では「主役は授業」と捉え、家庭学習を授業づくりの一環として位置付ける。

「教師にとって、45分の授業の中で力を付けることが絶対の使命です。家庭学習は、授業で出来なかったことを課すのではなく、次の授業に結び付くものであるべきと考えています。また、どの教師も同じ方針で指導しなければ、6年間を通じて思考力や表現力を育むことは出来ません。学校全体で方針を共有する必要があると考えています」（山平校長）

家庭学習の位置付け

授業との連動をより意識するため指導案に連動の工夫を記入

家庭学習については、授業改善の視点の一つに掲げられていたものの、授業に比べると担任に任される部分が大きく、これまで学校全体で検討することが少なかった。そこで10年度は、教師個々の実践を基に、授業との連動をより強めるための検討を進めている。研究授業時に作成する指導案にも、「授業と家庭学習との連動」を含めた四つの視点に沿った工夫を記入する欄を設けた。研究主任の愛甲昌弘先生はそのねらいを次のように話す。

「家庭学習との連動をより意識して授業を構成するためです。更に、事後検討会では、授業の流れや子どもの様子だけに終始せず、家庭学習についても、指導案を基に少しずつ話し合いを進めたいと考えました」

同校では、家庭学習時間の目安を「学年×10＋10分」と設定している。毎日、漢字の書き取りや計算練習などの基礎・基本を中心とした宿題を出し、余った時間には自主学習用ノートで自習するように指導する。家庭学習を通じて、「学び方」や「自ら学ぶ」姿勢を身に付けてほしいと考えるからだ。ただし、1～3年生は自主学習は難しいという判断で、宿題を中心としている。

家庭学習の目的は三つあると、愛甲先生は整理する。一つめは、学習習慣の定着。決まった時間に机に向かう習慣を付けるためのもの。二つめは、ドリル形式の学習によって基礎・基本の定着を図ること。思考力や表現力の育成は、基礎・基本の定着がなければ実現しないと考える。三つめは、思考力・表現力の育成。愛甲先生は、これを家庭学習の重要な目的と位置付けている。

「今後、思考力や表現力を育むことがますます重要になります。また、限られた授業時数の中で力を確実に付けるためには、家庭学習にも工夫が必要だと思いました。授業で力を育むことが前提ですが、家庭学習もその一部と考えれば、より力を育めると考えました」

家庭学習の内容提案

単元構成時に授業と家庭学習の双方から考える

思考力・表現力を育成するための授業と家庭学習の連動について、学校全体で検討を深めるために愛甲先生が行ったのが「三和小研究便り」での提案だ（P.16図）。その内容について、愛甲先生は次のように話す。

「一般的に、宿題や家庭学習の内容は、単元構成後に授業の進捗を踏まえて設定する『授業との連動を前提とした家庭学習』（図内②）が多いと思います。しかし、授業と家庭学習を連動させる指導では、家庭学習がなけ

三次市立三和小学校校長
山平弥生 Yamahira Yayoi
「モットーは、『教育の姿勢は厳しく、教育の心は優しく、教育の環境は美しく』」

三次市立三和小学校
愛甲昌弘 Aiko Masahiro
研究主任、6学年担任。「教師が学んでいなければ、子どもに学ばせることは出来ない。自分自身が学び続けたい」

図　「三和小研究便り」

三和小研究便り

平成22年12月1日
研究担当　NO．8

授業と家庭学習との連動について

授業と家庭学習との連動を研究の視点に掲げてはいるものの，これまでの授業研究会等ではなかなか話題にできず，実践が広がっているとはいえない状況にあります。
そこで，授業と家庭学習との連動について，その方向性や具体的な方法について提案をさせていただきたいと思います。

授業と家庭学習とを連動させるとは・・・

授業と家庭学習との連動させるためには，「授業と家庭学習との連動」を意識しながら，「授業」と「家庭学習」の両方を工夫・改善していくことが必要です。
それでは，具体的にどのようなことに取り組めばよいのでしょうか。
以下に，いくつか例を挙げておきます。参考にしていただきながら，各学年の学習内容や発達段階に応じて，工夫した取組みを進めていただけばと思います。

①　家庭学習との連動を前提とした授業の工夫

① 家庭学習で取り組んだことを活かせるような授業を考える。
・ 家庭学習で集めた資料の中から，パンフレットに入れるものを授業で選択させる。
・ 授業で作ったクイズを，家の人に出題して感想を聞き，ノートにメモする。
② 家庭学習で取り組むことを前提にした単元構成にする。
・ 家庭・地域での調べ学習を組み込んだ単元構成にする。
・ 授業で学習したことを家庭・地域で生かせるような単元構成にする。

②　授業との連動を前提とした家庭学習の工夫

① 考えたり表現したりすることが必要な家庭学習をさせる。
・ 家庭学習で，家族や地域の人に取材し，必要なことを調べさせる。
・ 日記や作文，紹介文，意見文などを家庭学習で書かせる。
・ 意見文を書くために必要な情報を，新聞やインターネット，本を使って調べさせる
・ 作文やスピーチに使えそうなネタ（情報）を集めてノートに書かせる。
② 授業の予習をさせることで，授業での思考・表現の時間を確保できるようにする。
・ 教材文を読んで，分からないところや考えたいところに線を引かせる。
・ 作文の構成や下書きを，家庭学習で書かせる。
・ 自分や友だちの作文を読み直し，改善が必要なところに赤線を引かせておく。
② 思考・表現の基礎・基本の力を定着させる。
・ 学習に必要な既習事項，漢字，語句を復習させたり，覚えさせたりする。

③　①や②を支えるための取組み

① 家庭学習の取り組み方を指導する。
・ 家庭学習の仕方や，ノートの使い方を指導したり，意欲的に取り組んでいる児童を紹介したりする（掲示物，学級通信など）
・ 自主学習の仕方を指導・例示する
・ 家庭学習の定着を家庭へよびかける（学級通信・冬休みのくらし・連絡帳など）
② 提出された宿題を添削し，直しをさせる。最後までやりきらせる。
・ 提出・直しの有無をチェックし，最後までやりきらせる。

＊同校の資料をそのまま掲載

れば成り立たない『家庭学習との連動を前提とした授業』（図内①）という考え方もあると思い、提案しました」

具体的な学習は、例えば国語では次のようなものになる。

「①家庭学習との連動を前提とした授業」では、「パンフレットをつくろう」という活動の中で、保護者や地域の人に話を聞いたり、自分で資料を集めたりすることで、地域で守りたい環境を探す家庭学習が考えられる。これは、環境保護について教科書の教材文で学ぶ単元で課された宿題だ。題材を探す活動を家庭学習で行うことにより、授業では、考える活動が確保される。個人で探した題材を授業に持ち寄り、グループでパンフレットにする題材を確定することで、選んだ題材についての思いを伝える場を授業にもつくることが出来る。家庭学習で行うと効果的なことを考えて、授業を構成する流れだ。

「②授業との連動を前提とした家庭学習」では、作文の授業の前に書きたいテーマを家で考えてくる、という家庭学習が考えられる。

「授業では書き方を伝え、子どもが考えて表現する時間を十分に確保したいのですが、そうするためには作文のテーマを考える時間も必要です。授業のねらいを考えた上で授業構成を練ると、授業では書き方の指導、または思考や表現の時間を重視し、作文のテーマは家で決めてきてもらおう、と判断できます。単元を構想する際に家庭学習についても併せて考えると、指導の幅が広がるのではないかと思います」（愛甲先生）

効果を高めるポイント

課題の内容と事後の指導で個々の学力差に対応

思考力や表現力が必要な宿題を課す場合、それらに取り組むことが難しい子どもへの配慮が必要だ。愛甲先生は次のような点に留意しているという。

一つは、どの子もある程度の結果を出せる課題とすること。例えば、問題の解き方を考える宿題では、質は問わず「1人3通りを考える」など時間をかければ出来るものにする。

もう一つは、考え方や表現の仕方を事前に指導すること。作文や読書感想文を課す時、「書いてきなさい」というだけでは取り組めない子どももいる。事前にテーマの選び方や構成の方法を指導することが大切だ。

「出来事を羅列するのではなく、中心となることを2、3個に絞って書くように授業で指導しました。その後、家庭学習の課題に作

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

文を出したところ、どの子どもも学んだことを生かした作文を書けていたことがありました。こういう時に子どもを褒めると、これからも授業で学んだことを生かそうという気持ちが高まると思います」（愛甲先生）

思考力や表現力が必要な家庭学習に限らず、個々の子どもの課題への対応が必要な場面もある。同校では、これらに対して次のような手立てを取ってきた。例えば、自主学習では何をすればよいのか分からない子どももいるため、教室に家庭学習ノートのコピーを見本として掲示している（**写真**）。さまざまな自主学習を見て、「こんなことをすれば良いのか」と気付き、自分の学習に取り入れる子どもも多いという。

また、どの教師も、専科などの教師と協力しながら、宿題をその日のうちに添削し返却している。誤答があったプリントは、教室の所定のカゴの中に返却し、子どもは自分のものがあれば休み時間に解き直す。すぐに復習することで効果が高まる他、毎日の宿題にも前向きに取り組むようになる。

「子どもは、教師が自分のことを見ているかどうかに敏感です。低学年の子どもは、花丸の花びらの数を数えるほどです。たとえ大変でも、宿題を提出したその日に返却することに大きな意味があるのです」（山平校長）

写真　教室に家庭学習ノートのコピーを掲示して、どのような学習をすればよいかが分からない子どもにヒントを与える。掲示された子どもにとっては、学びのモチベーションになる

成果 授業研究の土壌を生かし研究を深化

これまでの実践を通し、愛甲先生は、授業と家庭学習の連動により、思考力や表現力の育成という目標達成により近付けると感じている。学校全体での本格的な検討はこれからだが、指導案に「授業と家庭学習との連動」の視点も盛り込むことで、教師の家庭学習への意識は高まってきた。保護者へは保護者会や学校だよりで学校の考え方を伝えると共に、「保護者に聞く」などの課題を子どもに出すことで、学習内容に関心を示す保護者も増えている。

同校では、授業研究において、実践を基に気兼ねなく話すことを大切にしてきた。良いと思うものはまず取り入れ、実践について全員で議論し、次時の具体的な指導案を考える、という研究方法もその表れだ。愛甲先生は、家庭学習の検討についてこう話す。

「家庭学習には、『こうすると絶対に良い』という正解がありません。研究では家庭学習のみを考えるわけではなく、全体のバランスも大切です。これまでは、他の学級担任がどのような家庭学習を出しているのか見ることはあまりありませんでした。今後、子どものノートを見せ合ったり、『このような家庭学習をさせると良かった』という声を集めたりしながら、子どもにとって良い家庭学習を考えていきたいと思います」

山平校長が重視する 校長としての役割

先生一人ひとりが挑戦しやすい環境を整えることが、第一の仕事です。組織や予算の調整、情報収集、発表の場の設定などの条件を整え、先生方が余計な心配をせずに研究を進められるような配慮を常に心掛けています。学校の中だけでは分からないこともありますから、外での実践や、講座からの刺激で、常に挑戦したくなるように先生方を促すことも大切にしています。

決して忘れてはならないのは、私たちの仕事は必ず子どもに還元される必要があるということです。常に子どもの姿を見つめながら学校づくりを進めています。

年3回の「スリーアップ作戦」で授業力、学習習慣、学力定着を改善

京都府 京丹後市立峰山小学校

「全国学力・学習状況調査」において、家庭学習に関する項目が全国平均を下回っていた京丹後市立峰山小学校。課題克服に向け、「授業づくり」「学習習慣」「学力定着」の改善に集中的に取り組む「スリーアップ作戦」を年3回実施。教師、子ども、保護者それぞれの意識変革を促している。

取り組みのポイント

- ◉学力向上のために、①授業づくりアップ、②学習習慣アップ、③学力定着アップ、を３本柱に据える。6、11、2月に、これらに集中的に取り組む「スリーアップ作戦」を実施
- ◉授業の様子や子どもの育ちなど、学校の日常を保護者とこまめに共有し、理解や協力を得やすくする

課題と手立ての基本方針

家庭学習に大きな課題 学力向上の3本柱を設ける

風格ある校舎が印象的な峰山小学校。峰山町は丹後ちりめんの発祥地で、代々この町で暮らす住民が多い。子どもの様子について、和田省三校長は次のように話す。

「純朴で落ち着いた子どもが多いです。学習面では、基礎的・基本的な内容はおおむね定着していますが、論理的に考える力や活用力、正しい答えが出るまで何度も計算するような粘り強さには課題を感じていました」

家庭学習についても課題があった。竹本茂教頭は次のように話す。

「09年度の『全国学力・学習状況調査』の結果に、我々はショックを受けました。家庭学習時間や読書量など、家庭学習にかかわる項目が全国平均を下回っていたからです。それまで、家庭学習指導に学校全体として取り組んではいませんでした。しかし、家で学習する姿勢が身に付いていないことは、学びに粘り強く向かう姿勢の不足につながるのではないかと思いました。学ぶ姿勢なども含めた総合的な学力を付けるならば、学校での取り組みと共に家庭での取り組みも充実させ、両者で力を高めていく必要があると考えました」

同校では、家庭学習のみを改善するのでは

School Data

◎1869（明治2）年開校。長年、校内研究に力を入れて取り組む。2007年度には京都府教育委員会の研究指定を受けて、算数の研究発表を行った。近年は学区にある峰山中学校との連携にも力を入れる。

校長	和田省三先生
児童数	213人　学級数 10学級（うち特別支援学級1）
所在地	〒627-0013 京都府京丹後市峰山町不断1
TEL	0772-62-0077
URL	http://www1.kyoto-be.ne.jp/mineyama-es/
公開研究会	未定

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

なく、学校と家庭の両方の取り組みを含めて学力向上の施策を考えた。それが、「**授業づくりアップ**」「**学習習慣アップ**」「**学力定着アップ**」の3本柱だ（**図**）。この中で、同校が最も重視するのは、「**授業づくりアップ**」だ。

「子どもの学力向上が終着点で、そのために最も大切なものは授業です。学力向上につながる授業をつくるためには、教師の授業力向上が欠かせません」（和田校長）

水曜日は「授業研究の日」として、担任が研究授業を行う。また、日常的に職員室などでも授業交流や教材研究をオープンに進めている。目指すのは、子どもの発言をつなぎ、学び合いを通じて思考力を育む授業だ。10年度の研究は国語を中心とし、特に物語文の指導に力を注いでいる。

加えて特徴的なのは、保護者への日常的な発信だ。学校の方針は学校だより、授業の様子や子どもの姿は学級通信で伝える。特に学級通信は頻繁に発行し、研究主任の木本敦子先生をはじめ、毎日作成する担任もいる。

「学校での学習について具体的に伝えれば保護者も興味を持ちますし、子どもの様子を共有することで信頼関係が深まります。学級通信を書く作業は、毎日の授業や学級経営を振り返ると同時に、指導の方向性を考えることであり、授業づくりにも生かしています」（木本先生）

「**学力定着アップ**」のねらいは、基礎学力の定着と、子どもの自信や意欲を育むことだ。取り組むプリントは難しい問題にせず、シンプルで「やりきる」ことを大切にしている。

図　学力向上へ向けた3本柱

1 授業づくりアップ
- 「発言でつながり合う授業づくり」を目指し、教員研修を充実する
- 授業や児童の様子を学級通信等で伝える

2 学習習慣アップ
- 家庭学習の量・内容を改善し、家庭学習習慣を身に付けて、その伸びを子ども、家庭と共有する
- 高学年では、中学校進学に向けて自学自習の力を付ける

3 学力定着アップ
- 毎日15分のチャレンジタイムでのプリント学習や放課後の補習にて、基礎学力の定着を目指す
- 学習規律、学習態度を更に高める

＊同校の資料を基に編集部で作成

家庭学習の位置付け●●●

授業内容と関連した家庭学習で授業を深め、学習意欲を促す

「**学習習慣アップ**」では、家庭学習の習慣付けを工夫すると共に、家庭学習の内容についても検討を進める。同校では家庭学習の目的を、①授業の補完、②学習習慣の定着、③主体的に学ぶ姿勢の育成、としている。全学年で音読、漢字の書き取り、計算練習などの宿題を課す他、研究教科の国語においては授業内容と関連した宿題も出す。

例えば、物語文の学習では、子どもが考え、書く時間を授業中に十分に取るのが難しい。そこで、家庭学習で登場人物の気持ちや言動の理由などを考えさせておく。授業では思考や表現の時間が確保され、授業のねらいが達成されやすくなり、学習が深まる。

「一斉授業では、集団で考えを出し合いながら思考を深めていきます。子どもが個々の考えをしっかり持ち、意見を出し合えば、集団の思考が深まりやすくなります。自分の考えを持って授業に臨むので、授業に意欲的にもなります」（木本先生）

こうした課題を出した時には、家庭学習ノートは授業前に確認して返却する。教師が丸を付けたり、良い考えに線を引いたりすることで、子どもが自信を持って授業に臨めるからだ。子どもは安心して自分の考えを発表でき、グループでの話し合いも深まりやすい。

京丹後市立峰山小学校校長
和田省三 Wada Shozo
「先生方や子どもの気持ちを大切にして、『協働』と『信頼』でつながる学校をつくっていきたい」

京丹後市立峰山小学校教頭
竹本 茂 Takemoto Shigeru
「校長が示すビジョンを教室での実践につなげるため、子どもも教師も大いに学ぶ環境づくりを進めたい」

京丹後市立峰山小学校
木本敦子 Kimoto Atsuko
研究主任、2学年主任。「学級づくりは授業づくりから。子ども同士がつながり合う授業をつくりたい」

「事前にノートを確認し、内容を理解していない子どもが多い時は、授業で丁寧に説明したり、補助発問を準備したりするなど、子どもに合った授業をしています」（木本先生）

授業と関連した内容のため、家庭学習への意欲も高まり、習慣付けにつながる。ただし、低学年は一人で考えるのが難しいため、こうした課題は3年生以上で取り入れている。

「スリーアップ作戦」の実施●●●

学力向上に不可欠な3要素に集中的に取り組む

3本柱は年間を通じて重視しているが、年に3回、集中してこれらに取り組む時期がある。それが「授業づくり・家庭学習習慣強化月間」、通称「スリーアップ作戦」だ。各学期に1回、行事などの調整がしやすい6、11、2月にそれぞれ1か月間実施する。

「学力向上は、3本柱に総合的に取り組むことで初めて達成されると考えています。どれも年間を通じて力を入れていますが、行事などで忙しい時期もありますし、慣れも生じます。そこで、めりはりを付けて、全校的なキャンペーンを行って改めて意識を高め、教師と子どもが共に頑張って力を付けていきたいと思い、始めました」（和田校長）

「**授業づくりアップ**」については研修を集中的に行い、「**学力定着アップ**」については学習規律・学習態度をより丁寧に指導する。

「**学習習慣アップ**」については、学年や学習状況に応じた1週間単位のチェックシートを活用する。例えば2年生では、宿題の内容や取り組んだ時間、「数字や文字をていねいに書いた」「テレビを見なかった」「しゅう中してできた」などのチェック項目を設けた（**写真1**）。生活に関する指導を通して学習への構えを身に付けさせることがねらいだ。一方、5年生では、「学習・テスト予定」を見ながら子どもが自ら家庭学習の計画を立て、結果を自己評価するようにしている（**写真2**）。

「中学生になると、定期テストなどに備え、自分で計画を立てて学習することが求められます。高学年では、そうした学習習慣を付けることを特に意識しています」（竹本教頭）

期間を定めて取り組むことについて、木本先生は次のように話す。

「年間を通してチェックシートを使うと、途中から記入がいい加減になる恐れがあります。『忘れた頃に引き締める』という意味で今の方法が適切だと考えています。期間終了後も、しばらく家庭学習習慣は崩れません」

1週間が終わると、各自が振り返りを記入し、保護者にコメントをもらい提出する。保護者にはPTAの会合や学校だより、学級通信などで「スリーアップ作戦」の趣旨を繰り返し伝えていることもあり、大半は協力的だ。

写真1　2年生のチェックシート。毎日記録することで学習習慣の定着や生活習慣の改善を図る。子ども自身に1週間の自己評価をさせることも重要なねらい

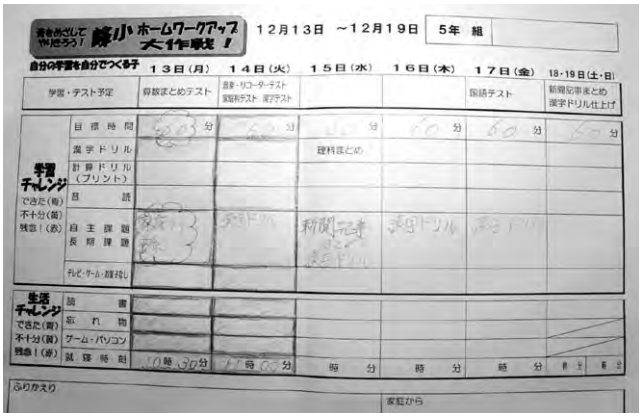


写真2　5年生のチェックシート。自分で目標時間や、学習する内容を決め、達成の度合いによって異なる色で塗って振り返りをする。学習やテストの実施予定日を記入しておき、自主学習で対策するように促している

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

「ただし、この時期だけ、あるいは家庭学習についてのみ保護者に協力をお願いしても、うまくいかないと思います。学級通信などで学校の方針や授業の様子を伝えるなど、日頃からこまめに情報発信しているからこそ出来ることだと思います」（和田校長）

個々の子どもへの対応

個別支援や補習を行い個々の学力差に対応

家庭学習の課題は一律としているが、個々の子どもの学力差を考慮する必要はあるというのが、同校の考えだ。

「理解が遅れている子どもの中でも、勉強が苦手だから、集中できないからと、その理由はさまざまです。自分だけ異なる課題を出されるのを嫌がる子どももいますから、必ずしも宿題の内容を変えることだけが適切な個別対応ではないと考えています」（木本先生）

家庭学習時間の目安はどの学年も「学年×10分」だが、あくまでも推奨時間とし、個々の子どもの実態を踏まえて柔軟に指導している。その理由を竹本教頭はこう話す。

「学習のスピードや集中力は一人ひとり異なります。例えば、漢字の書き取りなどでは、丁寧に書くかどうかによっても要する時間が変わります。一律に時間を決めてよいのかと、先生方で議論した結果です」

学力差の解消に向けては、「**学力定着アップ**」の一環として、全学年で学級ごとに週1、2回、放課後に保護者の了承を得て、理解の遅れている子どもを個別に教えている。

「特定の子どもを残しても、みんなが応援し合う雰囲気があります。普段から誰にでも得意・不得意はあることを伝え、それを互いに認めて頑張りをたたえ合える学級づくりを心掛けているからだと思います」（木本先生）

成果

「スリーアップ作戦」を軸とした学習習慣改善のサイクルが定着

子ども、教師、保護者のそれぞれに変化が見られると、竹本教頭は話す。

「授業研究を通じて、教師の課題意識が明確になり、つくりたい授業のイメージが固まってきました。それに伴い、家庭学習に求めるものが豊かになってきたと感じます」

日々の情報発信により、保護者の家庭学習に対する理解も進み、教師と共に子どもを育てるという意識が高まってきた。

特に大きな成果が見られたのは、「スリーアップ作戦」だ。年3回の実施により、子ども自身が年間を通じて伸びを実感できているという。実践後に教師や子どもが足りなかった点を見直し次につなげる改善のサイクルが定着しつつあり、11年度も継続する予定だ。

一連の取り組みを支える土台にあるのは、管理職も含めて教師同士が気軽に教えを求め合うオープンな雰囲気だ。和田校長も竹本教頭も、授業に入って担任を支援することもあるという。こうした学校文化があるからこそ、家庭学習の指導も学級を超えた共有や検討がスムーズに進んでいるのだろう。

次は中学校との連携の強化を視野に入れる。

「既に、校区の中学校との生徒指導連携や互見授業などを導入しています。小中の学習姿勢の違いについては『スリーアップ作戦』でも考慮していますが、まだ段差があります。中学校と現状や課題を共有しながら、連携の基盤をつくりたいと思います」（和田校長）

和田校長が重視する
校長としての役割

先生方が互いに信頼し、意欲的に教育活動を実践できる環境をつくることが、校長としての私のテーマです。その土台となるのは、一人ひとりの先生と十分にコミュニケーションを取り、思いや動きをしっかり把握すること。そして、教室を回り、学級通信をよく読み、授業の雰囲気や子どもの気持ちを理解すること。そのような実態把握を通して課題を整理し、全体に発信することを大切にしています。本校の素晴らしいところは、先生方の信頼関係がしっかりと出来ていることです。この雰囲気を保ち、研究の効果を更に高めていきたいと思います。

個々の課題を捉え、実態に即した家庭学習や補習を実施

東京都 墨田区立第三吾嬬（あづま）小学校

学習習慣や生活習慣を課題と捉えている墨田区立第三吾嬬小学校。授業と共に、家庭学習や補習の充実を図り、個々の課題にきめ細かく対応する取り組みを通じ、子どもたちが学習に向かう姿勢に変化が現れている。

取り組みのポイント

◉分かりやすい授業を目指すと共に、家庭学習と補習を充実。教師全員が力を合わせ、学力の底上げや学習習慣の確立を図る

◉家庭学習の方針は、発達段階や個々の子どもの実態を踏まえて各学年で検討。「家庭学習プリント」や「忘れ物カード」などで学習習慣と生活習慣の改善を目指す

課題と手立ての基本方針

学習習慣や生活習慣に課題
家庭学習と補習で授業を支える

第三吾嬬小学校は町工場が集まる下町情緒の感じられる住宅街にある。昔からの住民が多く、町内会などの活動が活発で、地域全体で子どもを育てる雰囲気があるという。金谷政一校長は子どもの様子を次のように話す。

「本校に赴任した教師が最初に驚くことは、子どもたちの人懐っこさです。明るく元気で、学校が大好きな子どもが大勢います。一方で、自分で考えて努力をする前に、人に頼ってしまう傾向が気になっています。子どもがこれからの社会を生き抜くために、主体的に考えて行動する力を育みたいと思っています」

学習面では、全体的に基礎学力に不足が見られ、2009年度の区の学力調査では平均に届かなかった。また、3年生頃から学力差が目立ち始め、中学校で授業に付いていけなくなる子どもがいる。家庭での学習習慣だけでなく、基本的な生活習慣が十分に身に付いていない子どももおり、担任1人では指導に困難を感じることもあった。そこで、学年全体で子どもを見てきめ細かく指導しようと、全学年で学年担任制を採用している。

金谷校長は、学力向上を第一の目標に掲げていると話す。

School Data

◎1875（明治8）年開校。学区内には五つの地域に「子ども会」があり、PTA組織の一部として活動するなど、地域社会と一体になって子どもたちを支えている。

校長	金谷政一先生
児童数	520人　学級数 17学級
所在地	〒131-0041　東京都墨田区八広2-36-3
TEL	03-3617-7513
URL	http://members2.jcom.home.ne.jp/sanazumasho-sumida/
公開研究会	未定

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

「すべての子どもに、公立中学校の授業に付いていける学力を育みたいというのが、教師共通の思いです。心が豊かになるためにも、学びを大切にすることは欠かせません。学習の土台となる生活習慣の定着、体力の向上と併せて、学力向上を目指しています」

施策は「授業改善、補習、家庭学習」を柱とする。授業を理解することが学力向上の第一歩とし、学んだことを子ども自身が実感できるよう、学習課題とまとめが明確な授業を目指す。研究授業は全教師が年1回行う。

ただし、理解度には個人差があり、授業だけでは学力が十分に定着しない子どももいる。研究主任の上田智恵子先生はこう話す。

「授業では分かったつもりでも、家で1人で取り組もうとすると出来なかったり、次の授業までに忘れてしまったりする子どもがいます。基礎・基本の定着が、本校の大きな課題です」

このような子どもを意識して行っているのが補習だ。毎週金曜日の放課後と、月2回の土曜日に実施。子ども一人ひとりの課題に即して、力を伸ばせるように指導している。

家庭学習の位置付け

学力と学習習慣定着のために実態に即して学年団で方針を検討

家庭学習指導では、基礎・基本の定着と、学習習慣の確立を図る。副校長の荒堀正実先生は次のように話す。

「中学生になった時、たとえ授業で難しい課題があっても、自分で学習する習慣があれば付いていけるからです」

家庭学習の目安は「学年×10分」だ。低学年では宿題が中心で、4年生から徐々に自主学習を取り入れる。内容や取り組み方は学年ごとに検討する。子どもと教師の関係を重視しつつ、発達段階や実態に応じた指導をするためだ。また、学年ごとに方針を統一することによって学年の教師間の連携が強まり、学年担任制の良さが更に引き出される。学年で成功した取り組みは全校で共有し、学年の実態に合わせて応用される。

各学年団は、年度の始めに話し合い、学年経営案と家庭学習の方針を「学年マニフェスト」として明文化している。教務主任の田路邦雄先生は次のように説明する。

「明文化する過程で考えが深まりますし、目的意識も教師間で共有しやすくなります。『目標を達成しよう』という気持ちが強くなるのも良さだと思います」

家庭学習の具体例

1枚のプリントに宿題をまとめ連絡帳を生活記録として活用

家庭学習の特徴的な取り組みを見ていこう。

【5年生】

学習習慣や生活習慣が身に付いていない子どもが多かったため、対策の一つとして「家庭学習プリント」を始めた（P.24写真1）。

墨田区立第三吾嬬小学校校長
金谷政一 Kanaya Masakazu
「教育のすべては、子どもたちのためにある。本当に子どものためになっているかを常に考えたい」

墨田区立第三吾嬬小学校副校長
荒堀正実 Arahori Masami
「子どもの話も教師の話もよく聞き、何を考え、求めているかを理解したい」

墨田区立第三吾嬬小学校
田路邦雄 Toji Kunio
教務主任、3学年担任。「子どもも教師も一人の人間として好きになり、認めることを心掛けたい」

墨田区立第三吾嬬小学校
倉田まゆみ Kurata Mayumi
生活指導主任、5学年主任。「褒めることを大切にし、成長に向かって『明日、何をするのか』を考えさせたい」

墨田区立第三吾嬬小学校
髙山 幸 Takayama Miyuki
保健主任、6学年主任。「子どもに『愛している』と、しっかり言葉で伝えたい」

墨田区立第三吾嬬小学校
上田智恵子 Ueda Chieko
研究主任、5学年担任。「子どもの内面を理解し、子ども同士がつながり合う授業をつくりたい」

表面には学校での出来事に関する日記と、今日の自分を振り返り、明日頑張ることを毎日書く。更に、文やイラストを自由に書けるコーナーと、自主学習を行うスペースがある。裏面には基礎・基本の定着を図る演習問題がある。5学年主任の倉田まゆみ先生は、両面を使った理由を次のように説明する。

「複数枚のプリントにすると、子どもがなくしたり忘れたり、集中して取り組めなかったりするので、1枚のプリントにまとめました。教師のチェックも効率がよくなりました」

裏面の演習問題には、子どもに自信を付けるために、授業で取り組んだ問題を載せることが多い。子どもは多く正解することで、自分の成長を実感して前向きな気持ちになれる。また、同じ問題を繰り返すことで、自分の分からないところを自覚しやすくなる。

連絡帳も家庭学習指導に活用する。連絡帳に「生活計画表」（**写真2**）を毎週貼り、1週間の予定を書き込む。1日の終わりに就寝時間や忘れ物の有無、家庭学習時間を子どもが記入し、保護者が確認してサインをする。返却時に添える教師のコメントは、以前より成長した点を褒めて花丸を付けるなど、子どもを励ますように心掛ける。

「子どもは先のことを把握できないと不安になり、見通しを持って過ごせません。『来週は忙しそう』『火曜はテストだ』と分かっていれば安心しますし、書かれた予定が保護者との話題になります。また、担任のコメントは、子どもを前向きにすると共に、保護者に子どもの頑張る姿を伝える手段にもなります。褒めることを心掛けてから、連絡帳をきちんと保護者に見せるようになった子どももいます」（倉田先生）

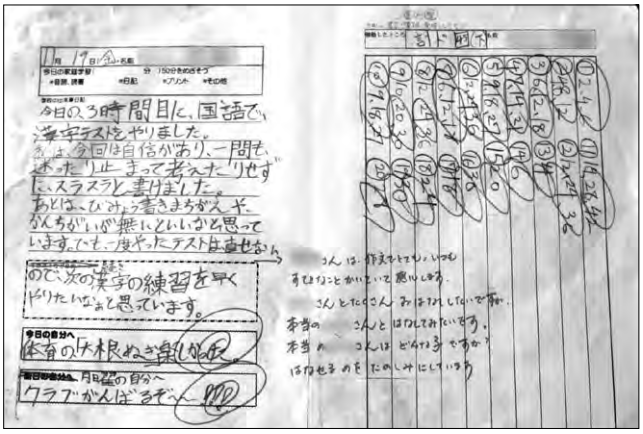


写真1　5年生「家庭学習プリント」の表面。左側には「学校の出来事日記」と文やイラストを自由に書けるコーナーがあり、「今日の自分へ」「明日の自分へ」（自己評価と目標）を書く。右側は自主学習（この場合は計算ドリル）に取り組むスペース

【6年生】

10年度の方針を「中学校を意識した取り組みをしていこう」とし、取り組みでは主体的な学習姿勢を身に付けるための自主学習を重視している。担任により宿題と自主学習の比率は異なるが、子どもの姿を伝え合いながら良い取り組みは共有している。

家庭学習ノートには、「忘れ物カード」を貼っている。忘れ物が多かったため、中学校入学前に生活習慣を見直す必要性を感じたからだ。毎日の忘れ物の状況や就寝時間などを記入し、更に子どもの振り返りと教師のコメントによって、規則正しい生活習慣の自覚を促している。

印象的なのは、「やれるだけやってみる」という教師の姿勢だ。6学年主任の髙山幸先生は次のように話す。

「学年で足並みを揃えることは大切ですが、ゼロから話し合い、すべてを整えてから始めると時間がかかってしまいます。良さそうなことは実践してみる。上手くいかなければ、相談しながら改善すればよいと思います」

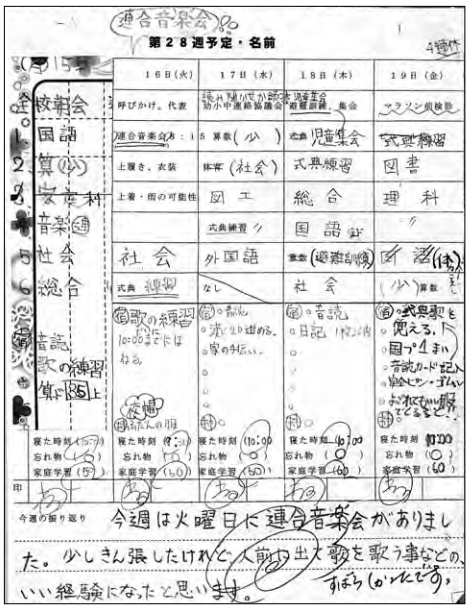


写真2　5年生の「生活計画表」。毎日、保護者がサインする欄があり、担任との間でコメントのやり取りも行う。毎日サインをもらうのが難しい家庭もあるが、「共に子どもを育てましょう」という姿勢で個別に呼び掛けている

全面実施への助走
第4回

授業づくりと共に深める家庭学習

補習の様子

教師全員が力を合わせ 個に応じた系統的な指導を実施

金曜日と土曜日の補習は役割が異なる。

金曜日の放課後に行う補習は、1週間の授業を補うことが目的で、全学年で学級ごとに実施。内容によって、参加する子どもや人数は異なる。10年度は区の予算により外部支援者2人の協力を得て、特に個別指導が必要な子どもを集めて少人数指導を行う。

土曜の午前中に月2回行う補習は「基礎・基本」「自学」の2コースがある。対象は4年生以上、各学年で「基礎・基本コース」6～7人、「自学コース」15人程度だ。「基礎・基本コース」は、担任が特に基礎・基本の定着を重視する子どもを選び、保護者の了解を得る。田路先生はこのコースを次のように説明する。

「学年ごとに教室を分け、一人ひとりの学力や学習進度に合わせて教科書や学校にあるドリルを用いて、教師が個別に指導しています。担当教師は当番制で、毎回カルテをつくって引き継ぎ、系統的な指導を心掛けています。自主的に参加する教師も多いです」

年度当初は3年生の算数の問題に取り組んでいた6年生が、1年経過しないうちに学年相応の問題に追いついたこともある。高山先生は、「その子がつまずいている部分から丁寧に指導したことに加え、教師が近くで見ているため、子どもが分からないことを気軽に聞ける環境にあったからでしょう」と話す。

「自学コース」は自由参加で、全学年が一つの教室に集まる。各自が自力で同校独自の漢字や計算のプリントに取り組み、終わったら外部のボランティアスタッフが採点。合格すると級が上がっていく仕組みで、学習意欲を高めながら基礎・基本を強化している。

成果

自尊心や自信が高まり コツコツと努力する子どもが増加

家庭学習の習慣化や基礎・基本の定着は確実に進んでいる。10年度の区の学力調査では、前年度に比べて学力が高まり、「自分はコツコツと勉強をしている」と答える子どもの割合が大幅に増えた。

「『やれば伸びる』という実感から自尊感情が高まって自信が付くと共に、努力の大切さを知ったのでしょう。学習に向かう姿勢も変化し、特に高学年はかなり創造的な学習活動が出来るようになってきました」（金谷校長）

個々の子どもへの対応が多く、教師の負担は大きいが、チームワークの良さが取り組みを支えている。学年担任制によって、教師が「一人ぼっち」にならない状況をつくるなど、学年でも学校全体でも教師が協力し合える仕組みや雰囲気が大きな強みだ。

「取り組み自体は決して特別ではありませんが、教師が日常的にコミュニケーションをとって、子どもにとって何が大切かを共有し、よく考えて動いています。『やればやっただけの成果がある』という実感も、前向きな気持ちを生み出しています」（荒堀副校長）

ベテランと若手が認め合う関係も組織力をより高めている。「経験年数に関係なく、課題に対して共に悩み、改善策を考えていく関係があります」と、上田先生は話す。

金谷校長が大きなビジョンを示し、現場の核となる教師がリーダーシップを取り、個々の教師が連携し協力し合う。そのような組織運営が、取り組みを大きく推進させている。

金谷校長が重視する 校長としての役割

子どもたちは小学校を卒業後3～10年ほどで社会に羽ばたいていきます。自分の力で未来を切り開ける子どもを育てるために、先生方の力を十分に引き出し、少しでもよい教育を実現することが、校長としての私の使命です。先生方はとても頑張っていて、感謝に堪えません。「大変だけれど、やりがいがある」と感じてもらえるように、教師としての楽しさを感じられる学校にしたいと思っています。これからも、先生方が情熱を共有し、ベテランが若い教師を伸ばしていけるような組織づくりに取り組んでいきます。

中学校・高校と一貫して国際交流する力を育む「カナダ学」

北海道鹿追（しかおい）町立鹿追小学校

鹿追町立鹿追小学校では、中学校、高校と一貫した外国語活動、「カナダ学」を行っている。「国際社会で生き抜く子どもを育てる」という目標を明確にし、コミュニケーションを重視した活動に取り組んだ結果、積極的に英語を用いて交流を図ろうとする子どもたちの姿が見られるようになってきた。

鹿追町として目指す子ども像を明確化し独自の教科を設ける

十勝平野の北西部に位置する鹿追町立鹿追小学校では、1年生から「カナダ学」として外国語活動を行っている。鹿追町には小学校が5校、中学校が2校、高校が1校あり、町全体で小中高一貫教育を進めている。

「カナダ学」は、2003年度、町内すべての小・中学校、高校が文部科学省から「小中高一貫した英語教育（カナダ学）」の研究開発校に指定され、取り組んでいる教科だ。小学校では年間49～65時間、中学校では年間35時間、高校では年間70時間を充てている。03年度当初、教育委員会で「カナダ学」を中心的に立ち上げた舟越洋二校長は、「カナダ学」を始めた背景を次のように説明する。

「鹿追町では以前から、姉妹都市であるカナダのストニープレーン町に高校1年生全員が2週間ほど短期留学していました。しかし現地に行っても、英語でのコミュニケーションが出来ませんでした。そこで、小学校から英語に触れる機会をつくろうと、『カナダ学』を設けたのです。また当時は、違う町の高校へ進学してしまう生徒も多く、子どもが進学したいと思えるような魅力ある教育をつくり、鹿追町を活性化したいという思いもありました」

小中高一貫教育では、「国際社会でたくましく生き抜く子どもを育てる」「ふるさとを愛し自慢する子どもを育てる」「自分の夢に挑戦し続ける子どもを育てる」を三つの柱とし、それぞれに対応する教科や取り組みを設けた。「カナダ学」は一つめの柱に沿った取り組みだ。

5、6年生では中学校の教師も授業を行い中学校入学時の不安を解消

06年度には、すべての小学校が同じ方向性で取り組めるよう、町独自の教科書と教師用指導書（図）を完成させた。通常の45分授業の「Lタイム」以外に、毎日5分の朝学習の「Sタイム」を教育課程に組み入れ、両者を関連付けたカリキュラムを作成している。研修部長の多治見忠先生は、その良さを次のように話す。

「新しい表現を『Sタイム』で前もって学ぶことで、『Lタイム』でのコミュニケーションの時間を増やせます。また、『Lタイム』で扱った内容を『Sタイム』で繰り返し、表現を定着させています。わずかな時間でも、英語に毎日触れさせたいと考えました」

「Lタイム」は学級担任が進行し、ALTやJTEが発音などをサポートする。5、6年生では、年間15時間、ALTやJTEに代わって校区の中学校から英語教師が参加する。

「ねらいは、小・中学校の円滑な接続です。子どもは中学校で英語を

教わる先生が分かって安心しますし、中学校の先生は小学校で触れている英語や、子どもがつまずきやすい点を把握できます」（舟越校長）

「1人の授業ではなく全員の授業」で英語に親しむ子どもを育む

鹿追小学校では、「カナダ学」の部会を設置している。多治見先生は、研究の様子を次のように説明する。

「研究授業の指導案は、『1人の授業ではなく、全員の授業』という気持ちで作ります。一部の先生だけでなく、全員で役割を担い研究を進めています」

研究授業で配布する「参観シート」には見てほしいポイントを示し、意見欄を設けている。「参観シート」は授業後に回収し、改善を重ねる。他にも算数など複数の部会があるため、部会同士の良い刺激がある中で研究が進められているという。

原見寿史教頭は、学校全体で取り組む体制の存在がこうした雰囲気をつくり出していると話す。

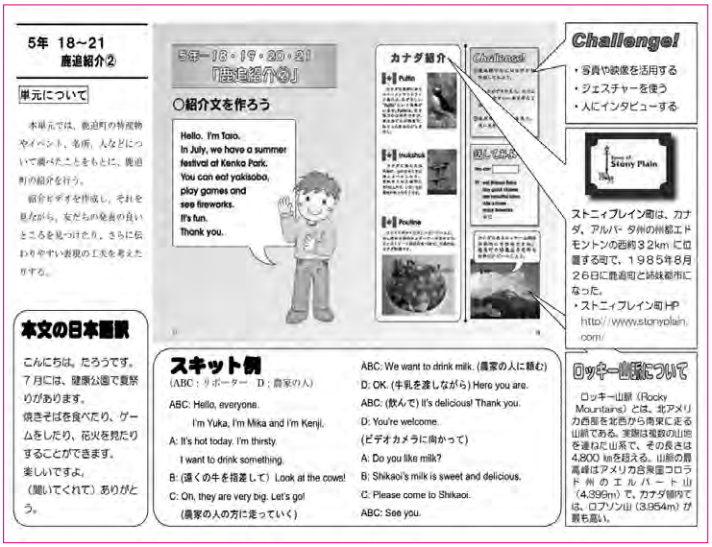
「英語が得意でない先生もいますが、全員が参加する雰囲気の中で、自然に一緒に取り組むようになります。子どもの変容を感じることにより、更に前向きな姿勢にもなります。本校では研究指定が一つのきっかけでしたが、先生方の意識を変えるためには、まずは推進体制をつくることが大切だと感じます」

子どもたちは、積極的に英語を話そうとするようになった。同校が毎年、カナダから訪問団を迎える際、自分から話しかけ、身振り手振りを交えてコミュニケーションを図ろうとする子どもが多い。中学校入学後、英語嫌いになる子どもは少なく、学習意欲も続いていくという。

舟越校長は、校長としての思いを次のように話す。

「『カナダ学』の立ち上げ当初は、その意義について、中学校や高校、地域とも多くの対話をしました。大変なこともありましたが、構想が実現し、子どもの実りになるのは本当に嬉しいことです。ただ、結果に満足して現状維持を図ると、低下につながります。校長として高い目標を掲げ、先生方と共に常に改善していくことが大切だと考えています」

図　5年生の教師用指導書


5年 18～21
鹿追紹介②

単元について

本単元では、鹿追町の特産物やイベント、名所、人などについて調べたことをもとに、鹿追町の紹介を行う。
紹介をポスターを作成し、それを見ながら、友だちの発表の良いところを見つけたり、さらに伝わりやすい表現の工夫を考えたりする。

本文の日本語訳

こんにちは。たろうです。
7月には、健康公園で夏祭りがあります。
焼きそばを食べたり、ゲームをしたり、花火を見たりすることができます。
楽しいですよ。
（聞いてくれて）ありがとう。

5年 18・19・20・21
「鹿追紹介②」

○紹介文を作ろう

Hello. I'm Taro.
In July, we have a summer festival at Kenko Park.
You can eat yakisoba,
play games and
see fireworks.
It's fun.
Thank you.

カナダ紹介

Challenge!

・写真や映像を活用する
・ジェスチャーを使う
・人にインタビューする

ストニィプレイン町は、カナダ、アルバータ州の州都エドモントンの西約32kmに位置する町で、1985年8月26日に鹿追町と姉妹都市になった。
・ストニィプレイン町HP
http://www.stonyplain.com/

ロッキー山脈について

ロッキー山脈（Rocky Mountains）とは、北アメリカ西部を北西から南東に走る山脈である。実際は複数の山脈を連ねた山系で、その長さは4,800 kmを超える。山脈の最高峰はアメリカ合衆国コロラド州のエルバート山（4,399m）で、カナダ領内では、ロブソン山（3,954m）が最も高い。

スキット例

（ABC：リポーター　D：農家の人）

ABC: Hello, everyone.
I'm Yuka, I'm Mika and I'm Kenji.
A: It's hot today. I'm thirsty.
I want to drink something.
B: (遠くの牛を指差して) Look at the cows!
C: On, they are very big. Let's go!
（農家の人の方に走っていく）
ABC: We want to drink milk. (農家の人に頼む)
D: OK. (牛乳を渡しながら) Here you are.
ABC: (飲んで) It's delicious! Thank you.
D: You're welcome.
（ビデオカメラに向かって）
A: Do you like milk?
B: Shikaoi's milk is sweet and delicious.
C: Please come to Shikaoi.
ABC: See you.

単元ごとに子どもにどのような力を身に付けさせたいかを、「友だちの発表の良いところを見つけたり、さらに伝わりやすい表現の工夫を考えたりする」というようにまとめ、授業づくりの方向性を明確化。英語に苦手意識がある教師でも自信を持って指導できるよう配慮し、教科書の日本語訳やスキットの例を示している。また、教科書に盛り込まれた鹿追町とカナダの紹介、両者の文化の比較などについて、解説の仕方も例示している。自分の住む町への関心を高め、国際理解も深めてもらおうというねらいだ
＊同校の資料をそのまま掲載

School Data

北海道鹿追町立鹿追小学校

概要	1911（明治44）年開校。町内最大規模の小学校として、「カナダ学」や鹿追町の自然を通して環境問題を考える「地球学」など、小・中・高が連携した活動を中心的に進めている。2009年度、通知表に「カナダ学」の欄を設け、ABC3段階評定を導入した。
校長	舟越洋二先生
児童数	256人
学級数	11学級（うち特別支援学級4）
所在地	〒081-0222　北海道河東郡鹿追町東町3-2
TEL	0156-66-2139
URL	http://academic4.plala.or.jp/shikasho/
研究発表会予定	2011年9月16日（金）

鹿追町立鹿追小学校
舟越洋二 Funakoshi Yoji
校長
「『その取り組みは子どもにとって本当に良いものか』を絶えず検証し、改善を続けたい」

鹿追町立鹿追小学校
原見寿史 Harami Toshifumi
教頭
「これまでの伝統を生かしながら、より良い活動を追究したい」

鹿追町立鹿追小学校
多治見 忠 Tajimi Tadashi
研修部長　5年生担任
「目の前の子どもたちが何を求めているのかを常に意識し、それに向かって取り組む教師でありたい」

つながる

学校と家庭の学び

児童の振り返りと保護者通信で家庭学習習慣が定着

福岡県川崎町立池尻小学校

川崎町立池尻小学校では、保護者の協力を得ながら学力向上に取り組んでいる。子ども自身に生活の課題を自覚させる「いきいき池小っ子カード」や、取り組みの様子を保護者に細かく伝える「学力アップ通信」などにより、保護者の協力意識が高まり、家庭学習習慣も定着しつつある。

「学力アップ通信」で家庭学習習慣化を呼び掛ける

川崎町立池尻小学校は、福岡県のほぼ中央、かつての筑豊炭田の中心地にある。人懐こく、元気な子どもが多いが、学力面で課題を抱えていた。２００８年度、川崎町が町内の小・中学校の学力向上支援を始めたのを契機に、家庭学習の習慣化に取り組んでいる。辻秀志校長は、そのねらいを次のように話す。

「基礎的な学力を身に付けさせるためには、家庭での学習習慣の定着が必要です。その土台となる規則正しい生活習慣を家庭の協力を得て定着させることが不可欠だと考えました。先生方も同じ思いでした」

生活習慣改善のための取り組みの柱が、「いきいき池小っ子カード」（図1）だ。「10時までにねる」「7時までに起きる」「朝食を食べる」「家庭学習」など、毎日指導している全学年共通の7項目について、子ども自身が毎月最初の1週間の生活を採点する。就寝・起床時刻は学年ごとにグラフ化して廊下に掲出し、子どもの意識を高めている。

「この取り組みは先生方のアイデアから始まったもので、日々のねばり強い指導によって成果が表れています。あくまで子ども自身に生活の課題を自覚させるのが目的なので、カードは家庭には持ち帰りません。保護者には『学力アップ通信』（図2）でねらいや結果を伝えています。そのため、カードの記入期間には家庭での声掛けが多くなるようです」

「学力アップ通信」は、学力向上や生活習慣改善に特化した学校通信だ。通常の学校だよりとは別に月1回発行し、学校の取り組みやそれに対する子どもの様子、「全国学力・学習状況調査」の出題内容や結果などを紹介する。

10年度は、「学力アップ通信」を使って家庭学習についてのアンケート調査を実施した。質問は「学習内容について子どもとどんな話をするか」「家庭学習について子どもとどんな約束をしているか」などで、他の保護者の参考になりそうな回答は、次号以降の通信で紹介する（図2）。学校からの要望ではなく同じ保護者の声によって、学力向上に対する意識を高めようというねらいだ。

図1　「いきいき池小っ子カード」

項目ごとに、達成できれば○、出来なければ×を書き込む。○を一つ1点として採点。振り返りのコメントを記入する。「テレビ見ないデー」は午後8時以降テレビを見ない日で、習い事などの都合に合わせて、1週間の特定曜日を子どもが自分で決める。

「目的はテレビを見せないことではなく、勉強や読書に充てる時間を増やすことです」（藤川先生）

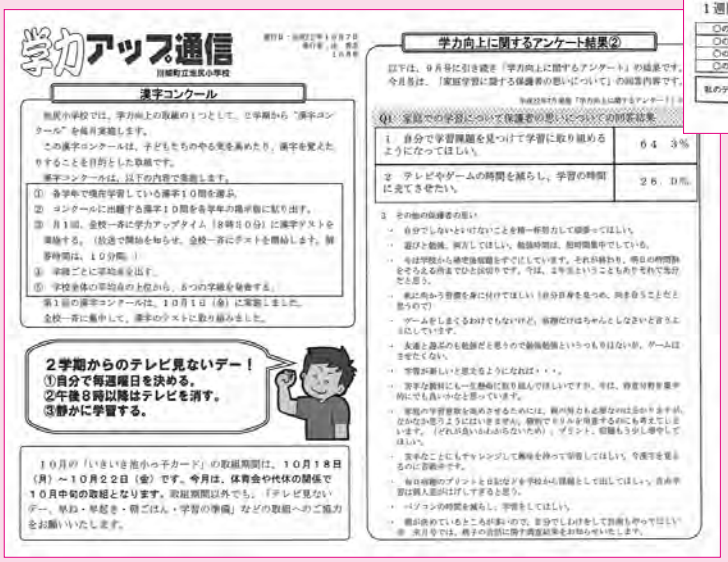
「いきいき池小っ子カード」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロード出来ます

http://benesse.jp/berd/
→情報誌ライブラリ（小学校向け）

図2　「学力アップ通信」

「学力アップ通信」で行った家庭学習に関する保護者の意識調査では、次のような声が寄せられた

- 「宿題は必ずさせています」
- 「家庭で教材を用意しようとしても、どれが子どもに合っているのかが分かりません。学校のプリントや宿題をもっと増やしてください」
- 「今は得意科目の勉強から学ぶ喜びを知ってくれれば良いと思うものの、いずれは苦手科目の勉強にも積極性を持ってほしい」



同校では校区の住民に向けても学校だよりを発行し、取り組みの概要を伝えている。

「川崎町で保護者の協力を得るには、本校の取り組みに対する地域全体からの理解が不可欠です。校区の区長さんに学校だよりを配布し、全家庭に回覧してくれるようお願いしています。また、私自身も定期的に校区の会議に出席し、交流を深めています」（辻校長）

毎朝の「学力アップタイム」で基礎を定着させる

同校では学力向上のために、家庭での取り組みだけでなく、朝学習や校内研究の充実にも力を注ぐ。毎朝20分間、全学年で行う朝の学習時間「学力アップタイム」では読書や作文、川崎町内すべての小学校で使われているベネッセのドリルを活用した漢字と計算の練習などに取り組んでいる。内容は曜日ごとに決まっているが、学力調査などで課題が見付かった場合、「強化月間」として1か月間、漢字と計算の練習を集中的に行う。教務主任の藤川和久先生は、ドリルの活用例を次のように話す。

「漢字は月曜日に練習し、金曜日にテストをしています。新出漢字はまず授業中に担任が教えた上で、ドリルに取り組みます。更に、授業の空き時間や宿題を利用して繰り返し練習させることで、基礎の定着を図っています」

宿題には、国語と算数の復習用プ

SCHOOL DATA

福岡県川崎町立池尻小学校

◎1951（昭和26）年開校。2008年度より、川崎町の方針を独自にアレンジしながら学力向上と家庭学習習慣化に取り組む。「学力アップ通信」などを通して、保護者への呼び掛けを積極的に行っている。

校長　辻　秀志先生
児童数　248人
学級数　13学級（うち特別支援学級2）
所在地　〒827-0002
福岡県田川郡川崎町池尻923
TEL　0947-44-0111
E-mail　ikejiri@jeans.ocn.ne.jp
URL　なし

川崎町立池尻小学校校長
辻　秀志
Tsuji Hideshi
「常に自分を高めようとする子どもを育てたい」

川崎町立池尻小学校
藤川和久
Fujikawa Kazuhisa
教務主任
「子どもに意欲的に学びへ向かう力を身に付けさせたい」

リントを学校独自に作成している。漢字と計算の練習を中心に、応用問題も載せる。また、どのクラスにも一定量の宿題を出させるために、家庭学習時間の目標を「学年×10分」と定めている。

こうした取り組みは、「教師の授業力部会」「児童の学ぶ力部会」「基盤の力部会」「家庭学習の充実部会」「条件・環境整備など部会」の五つの学力向上対策委員会で決定・改善する。学校全体として取り組めるよう、管理職を含めた全教師がいずれかの部会に属する。

「各部会では進捗や課題について話し合い、月1回開かれる全体会議で情報を共有します。部会があることで、異動してきた先生もすぐに取り組みに参加できます。そうした場で学校が目指す方向性を明確にし、先生方の意識をまとめることが、校長の役割だと考えています。学力調査の結果も私なりに整理・分析し、毎月発行する『校長室だより』で考えを先生方に伝えるようにしています」（辻校長）

「学力アップタイム」の漢字ドリルの時間。なぞり書き、そら書きなどを繰り返す。ドリルを宿題とする場合、既習漢字を「1字10回ずつノートに書く」というように指示する。基礎・基本の復習に重点を置くため、未習漢字は宿題としない

毎月1回、「学力アップタイム」に「漢字コンクール」を全学年で実施。1か月間にドリルで学習した漢字から10問が出題される。平均点の高いクラスは廊下に掲示する。
「子どもに点数を意識させ、学習意欲を高めることがねらいです」（藤川先生）

取り組み3年目で、成果は子どもの学力に現れてきた。10年度の「全国学力・学習状況調査」では、どの学年でも国語と算数の正答率が09年度と比べて向上した。授業態度が落ち着き、「学力アップタイム」に集中して意欲的に取り組む子どもも増えている。

また、自発的に大きな声で挨拶をしたり、校内清掃に積極的に参加したりするなど、生活態度にも改善が見られるという。

「生活習慣については引き続き声掛けが必要ですが、家庭学習習慣は定着しつつあります。自らすすんで意欲的に机に向かう子どもの育成を目指し、五つの部会を中心に全教師が一丸となって学力向上のPDCAサイクルを活性化したいと考えています。保護者や地域、町教委の協力を得ながら、学力向上のために出来ることはどんなことでもしていく覚悟です」（藤川先生）

学校&家庭 学び応援プロジェクト

授業でご活用いただける、キャリア教育に役立つ冊子『ジブンよススメ ワークブック』参加受付中!

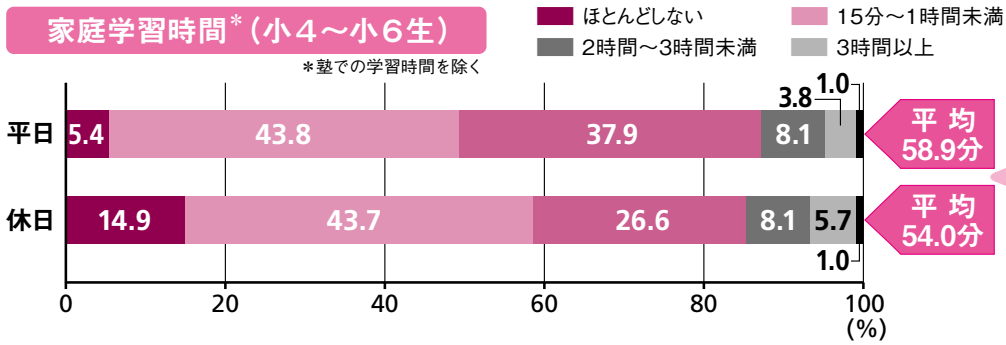
ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2009年度は、のべ約8,200校から約125万冊ものお申し込みをいただきました。今回、①小学5・6年生の児童向けに、授業で使えるキャリア教育冊子「ジブンよススメワークブック2010」、②小学6年生の児童向けに、学び方のコツがわかる冊子「中学校に入って役立つ! 自宅でやっている3つのルール」を無料でご提供いたします。ただ今、参加受付中です。詳しくは下記の専用ホームページをご覧ください。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。

※応募多数の場合、在庫がなくなり次第終了となります。ご了承ください。

学校&家庭 学び応援プロジェクトホームページ http://www.benesse.co.jp/manabiouen/

子どもの1日の家庭学習時間は、平日、休日ともに1時間程度

家庭学習時間*（小4～小6生）

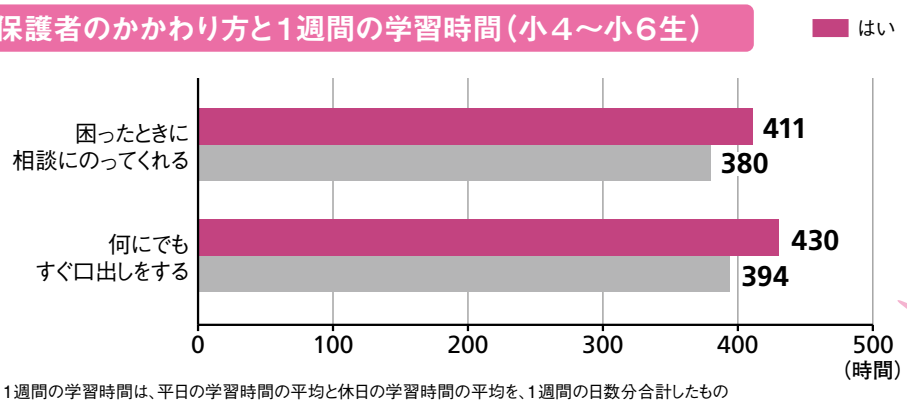


子どもの1日の家庭学習時間は、平均すると1時間程度。特に休日は、学習時間のばらつきが大きくなっている

出典：Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」
調査時期は2009年8月～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生（うち小学生は3,561人）、調査方法は学校通しの質問紙による自記式調査

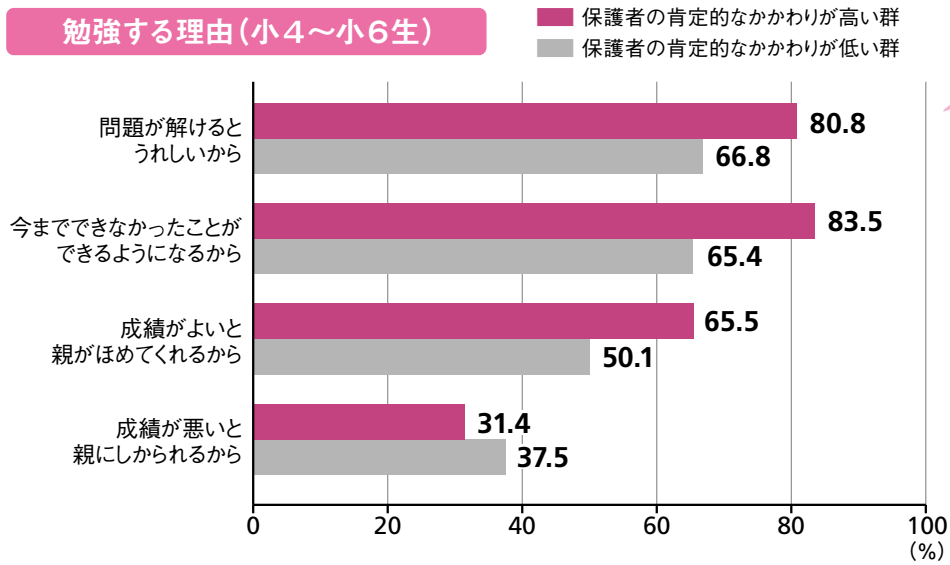
保護者の肯定的なかかわりが高い方が、学習する理由が前向き

保護者のかかわり方と1週間の学習時間（小4～小6生）



注）1週間の学習時間は、平日の学習時間の平均と休日の学習時間の平均を、1週間の日数分合計したもの

勉強する理由（小4～小6生）



保護者の子どもへのかかわりが強いと、たとえそれが子どもにとって否定的なものであっても、家庭学習時間は増える。ただし、肯定的なかかわりが高いほど、肯定的な理由で勉強をする子どもの割合が増える

注）「保護者の肯定的なかかわりが高い」とは、「勉強を教えてくれる」、「いいことをしたときにほめてくれる」、「悪いことをしたときにしかってくれる」、「困ったときに相談にのってくれる」、「あなたのことを大人として扱ってくれる」の項目に「当てはまる」と回答した割合が高いことを表す

出典：Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」
調査時期は2009年8月～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生（うち小学生は3,561人）、調査方法は学校通しの質問紙による自記式調査

上記の関連データはコチラ！
http://benesse.jp/berd/
＊「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

読者のページ

Reader's VIEW

2010 Vol.3 特集「『目指す力』と実践をつなぐカリキュラム」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト（http://benesse.jp/berd/）でご覧いただけます。

◎髙階玲治先生が「理論編・カリキュラム作成のポイント」の中で、①変わった点を確認する　②変わらなかった点を確認する、の両面からの取り組みを示されていました。変わった点ばかりに目が向きがちですが、変わらない部分も再確認する重要性に改めて気づかされました。今後の校内研修などに活用していきたいと思います。　［福井県／M小学校／K・H］

◎今の先生は、カリキュラムづくりの必要性を感じていません。管理職が指示するのでつくるという状態です。髙階玲治先生の言葉から、なぜカリキュラムが大切かがよく分かりました。　［岐阜県／U小学校／T・M］

◎鹿児島市立山下小学校の「学び」を生かす子どもを育むための二つの取り組みである、「『学び』の系統・関連の明確化」と「子どもが『学び』を生かすようになるための手立ての充実」がとてもよく分かり、良い実践であると思いました。　［愛知県／F小学校／S・T］

◎鹿児島市立山下小学校の、既習事項を生かして課題解決をしていく実践は本校でも取り組んでおり、共感できました。10ページの「『学び』を生かすようになるための手立ての工夫」に「振り返りをしやすいよう、ノートの書き方を指導し…」とありますが、その具体をもう少し知りたいと思いました。　［岩手県／O小学校／K・Y］

◎宇都宮市立上河内西（かみかわちにし）小学校の「ヘキサゴンプラン」には、2007〜10年度での重点の変遷が示され、どこがどう変わったかが分かるように工夫されていました。これにより、背景にある子どもの実態、指導者の反省点や指導の具体的な方向性も職員間で共有しやすそうだと思いました。　［長野県／I小学校／G・J］

◎宇都宮市立上河内西小学校の「ヘキサゴンプラン」に関心を持ちました。日頃の教育活動では目指す子ども像とのつながりを意識するようにしていますが、この実践では「カリキュラム全体像」でそれが一目で分かるように工夫され、シンプルであるところが良いと思いました。本校のような小規模校（児童数18人）でも自校化を進めたいと思います。　［鹿児島県／K小学校／U・M］

◎宇都宮市立上河内西小学校の「負担を減らしながらねらいを達成する『経営統合』」は、どの教員もアイデアを出すことで経営に参加している意識を持たせることができ、学校の活性化につながると思いました。　［東京都／M小学校／Y・S］

◎上越市立春日小学校の、グランドデザインをカリキュラムに反映する手法が、参考になりました。本校はグランドデザインとカリキュラムがうまく一体化していなかったので、学ばせていただきました。　［香川県／S小学校／O・T］

◎上越市立春日小学校のカリキュラムは、教師がつくり、目で見え、評価の時に使いやすいと思いました。一目で分かり、計画性があることが良さだと感じます。これを参考に本校でもつくり、修正を加えていきたいと思います。　［大阪府／Y小学校／Y・N］

◎上越市立春日小学校の「視覚的カリキュラム表」作成にあたり、教育委員会が土台となるカリキュラム表を作成して全校に配布し、各校がアレンジするという体制が大変参考になりました。１校だけで独自に取り組むよりも、効率的で、良いアイデアが生まれると思いました。　［栃木県／H小学校／S・S］

編集後記

今号を含め、1年間を通じてご紹介してきた学校に共通しているのは、先生方が気軽に相談をし合えたり、より良い授業づくりに向けて率直に意見交換できたりする環境があることです。校長先生のビジョンを基に、先生方全員での検討を無理なく続けることで、子どもの実りとなるのだと感じます。今後もこのような学校をご紹介しながら、先生方と小学校教育について考えてまいりたいと思います。（青木）

VIEW21 小学版 2010 Vol.4　2011年2月19日発行／通巻第27号

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太
撮影協力　荒川潤、川上一生、南弘幸

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部　＊2月21日に移転いたします
◎2011年2月21日から
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビルディング13階
電話 03-5320-1287
◎2011年2月20日まで
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー 22階
電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2011